

わが国における会計史研究の先駆的業績 —海野力太郎の『簿記學起原考』（1886）について—

中野常男

海野力太郎（1861～1944）は、わが国における会計史研究の先駆者であり、洋式簿記（特に複式簿記）が本格的に導入されるようになって間もない、その黎明期に出版された彼の『簿記學起原考』（1886）は、会計の歴史を専門的に取り上げた単行本として、わが国で最初、そして、世界的に見ても、イギリスで刊行された Benjamin F. Foster の *The Origin and Progress of Book-keeping*……（1852）に次ぐ、第二番目のものと位置づけられる。

本稿では、一次史料の蒐集と分析が容易でなかった時代に、海外の先行研究に依拠するものではあったが、わが国における会計史研究の先駆的業績とされる海野の『簿記學起原考』について考察する。

I 開題

II 『簿記學起原考』の考察

II - 1 海野の略歴と『簿記學起原考』の構成

II - 2 「序文」

II - 3 「例言」, 「引用書目」等

II - 4 本文

1) 刊行の言葉

2) 複式簿記の起源

3) 複式簿記の理論

4) 15世紀～16世紀

5) 17世紀

6) 18世紀

7) 19世紀

8) 簿記の文献目録と結び

III 結語

I 開 題

本稿の目的は、単行本として、会計の歴史を専門的に論じた、わが国で最初、そして、世界でも第二番目のものと位置づけられる海野力太郎（纂譯）『簿記學起原考』（1886）を考察の対象に取り上げ、その叙述内容を詳細に検討することを通じて、わが国への洋式簿記の本格的導入の黎明期に登場した先駆的な会計史研究の内容を明らかにすることにある¹⁾。

わが国の会計の歴史を文献史的に振り返って見るとき、複式簿記を解説した最初の著作が登場するのは、1873（明治6）年のことである²⁾。この年の12月に刊行された『銀行簿記精法』（全5分冊）——これは、わが国における近代的銀行の嚆矢となる第一国立銀行の設立・開業に伴い、当時の大蔵省から銀行簿記の統一マニュアルとして、お雇い外国人であったイギリス人（スコットランド人）の Alexander A. Shand が講述し、海老原済と梅原精一が邦訳したものの——がそれにあたる³⁾。

この『銀行簿記精法』の刊行に先立つ1873年6月に、福澤諭吉の『帳合之法』——これは、アメリカの Henry B. Bryant と Henry D. Stratton, Silas S. Packard による簿記書 *Bryant and Stratton's Common School Book-keeping;...*（1st ed., 1861）の邦訳書——が出版されているが、それは、全4分冊からなる同書のうち、単式簿記（「略式」）を解説した前半の2分冊（「初編」）のみであり、複式簿記（「本式」）を解説した後半の2分冊（「二編」）の刊行は翌1874年6月になる⁴⁾。

また、同じ1873年の10月には、加藤斌の『商家必要』——これは、イギリスの William Inglis の簿記書 *Book-keeping by Single and Double Entry;...*（1st ed., 1850）の邦訳書——が出版されるが、これも、1873年に出版されたのは、全4分冊と附録からなる同書のうち、単式簿記（「單認」）を解説した前半の2分冊（「初編」）であり、複式簿記（「複認」）を解説した後半の2分冊（「二編」）と「附録」の刊行は1877年4月になる⁵⁾。

さらに、「學制」（教育法令）の公布（1872）に伴い、1875年に、当時の文部

省から、簿記に関する国定教科書として、小林儀秀の邦訳簿記書『馬耳蘇氏記簿法』(全2分冊)——原書はアメリカの Christopher C. Marsh の簿記書 *A Course of Practice in Single-Entry Book-keeping*, …… (1st ed., 1853) ——が出版され、翌1876年には同じ小林による『馬耳蘇氏複式記簿法』(全3冊分)——原書はやはり Marsh の *The Science of Double-Entry Book-keeping*, …… (1st ed., 1830) ——が刊行されている⁶⁾。

このように、海野の『簿記學起原考』は、「文明開化」という言葉に代表される明治政府の欧化政策の下で、それまでのわが国固有の簿記法(「和式帳合法」)に代えるべく⁷⁾、複式簿記を代表例とする洋式簿記が本格的に導入されるようになってからわずか数十年しか経過していない、まさにその黎明期に出版された著作である。本書は、複式簿記の知識それ自体が十分に浸透しておらず、簿記に関する著作の多くが啓蒙的・教育的な翻訳(翻案)簿記書であり、かつ、その教示内容も複式簿記の紹介やその技術的解説の域にとどまっていたという当時の状況下において、複式簿記の起源とその発展に関する史的考究に果敢に挑戦したという点で、わが国の会計史研究の歴史において、画期的意義を有する著作であると同時に、きわめて異色の著作でもあった。

ただし、海野の『簿記學起原考』は、わが国で最初に会計の歴史を取り上げた著作ではない。すなわち、同書に先行して、曾田愛三郎の「記簿法 Book-keeping」がある。この論稿は、明治初期の新しい諸学課(学科)の起源について、外国の文献を基に編輯・解説した便覧的小冊子である『学課起源畧説』(1878)に、「化學」(Chemistry)や「理學」(Natural Philosophy)と並ぶ項目として収載されていた⁸⁾。その中で、曾田は、簿記(特に複式簿記)の歴史について、わずか3頁強ではあるが、これを略述していたのである⁹⁾。

したがって、海野の『簿記學起原考』は、わが国において会計の歴史を取り上げた最初の著作とは言えないが、複式簿記導入の黎明期において、会計、特に複式簿記の起源やその後の沿革について専門的に取り上げたわが国で最初の本格的な著作であり、同時に、会計史研究に関する単行本としては、イギリスで刊行された Benjamin F. Foster の *The Origin and Progress of Book-*

keeping:…… (1852) に次ぐ、世界で第二番目の著作と位置づけられる¹⁰⁾。

次節では、『簿記學起原考』について、まず著者である海野の履歴、および、同書の構成について概観した後、その叙述内容を逐次的に考察することにより、わが国における先駆的な会計史研究の内容を明らかにしたい。

なお、以下において海野の文言を『簿記學起原考』から引用する場合、原文の雰囲気伝えるため、縦書きを横書きに改める他は、下線や傍点を含めて、彼の表記をできるだけそのままに「」を付して掲記している (ただし、引用文中に〔 〕を付して追記した文言はすべて筆者によるものである)。

Ⅱ 『簿記學起原考』の考察

Ⅱ - 1 海野の略歴と『簿記學起原考』の構成

『簿記學起源考』を刊行した海野 (1861~1944) は、大和郡山藩の藩士の家に生まれ、三菱商業学校を卒業した後、三菱会社に会計方として入社するが、その後に日本鉄道会社に転じ、さらに、通信省鉄道局、鉄道院、帝国鉄道協会に勤務するなど、晩年までもっぱら鉄道関係の業務に携わっている。その意味で、彼は、わが国で最初に会計 (簿記) の歴史に関する論稿 (「記簿法 Book-keeping」(1878)) を著した曾田と同様に、会計 (ないし会計史) の専門的研究者ではなかった。あくまでも実業人、強いて言えば学者的実業人であった¹¹⁾。

海野が著した『簿記學起原考』は、大きく五つの部分から構成される。すなわち、(1)「序文」(田口卯吉:漢文)、(2)「例言」、(3)「引用書目」、(4)「本文」、(5)「跋文」(推薦文)(根岸免三郎:漢文)である。

このように、本書は、本文わずか39頁の小冊子であるが、「序文」と「跋文」を備えた、当時の著作としての本格的な構成を採っている。以下では、上記の構成の順にしたがって、「序文」から見ていくことにしよう。

Ⅱ - 2 「序文」

『簿記學起原考』の冒頭には、以下の「序文」が掲げられている。すなわち、

「竊考古今之變遷凡事有餘裕而後有其史人之出世也未曾有史也漸及歷年所始有言治亂興亡之蹟者學術技藝之作也未曾有史也漸及到利用始有錄起原沿革之情者人間百般事項無不皆然獨至簿記法余未聞有史云者也豈其學者考其沿革之不暇乎友人海野君近日閱諸書凡事涉簿記法者悉收拾之略成史體題曰簿記學起原考其書雖非長卷大冊以我日本之後進反着鞭歐人之前其於此學綽々乎有餘地可知也故及徵序喜題數言還之云

明治十九年七月

田口卯吉撰¹²⁾

上掲の「序文」(漢文)は、明治期の著名な経済学者であり、文明史家かつ政治家でもあった田口卯吉によるものである¹³⁾。この「序文」、特に後半において、田口は、友人の海野が欧米の簿記書等の收拾(蒐集)に基づいて著した簿記の略史、それは『簿記學起原考』と題され、決して大著ではないが、わが国が簿記(洋式簿記)の後進国であっても、その歴史研究に関してはヨーロッパの先を行くものであることを称揚し、喜んで本書の序文を著した旨を記している。かかる田口の「序文」は、会計史研究における本書の意義を十分に理解したものであると言えよう。

Ⅱ - 3 「例言」, 「引用書目」等

『簿記學起原考』には、上掲の「序文」に続けて、次のような「例言」が示されている。すなわち、

「 例言

- 一 此書初メ原語ヲ拔萃シ纂メテ歐文ノ一小冊ヲ成スヲ期ス然ルニ目今我國簿記ヲ學ブ者大抵皆ナ譯本ニ據リ其原書ニ就ク者ハ實ニ十中ノ一二ニ過ギス則チ恐ル余カ原文拔萃モ亦遂ニ世ノ眼目ヲ經ズシテ空シク塵埃ニ委シ去ランコトヲ是ニ於テ自ラ淺陋ヲ

〔論文〕 わが国における会計史研究の先駆的業績（中野）

揣ラズ茲ニ其大要ヲ譯述シ以テ世ノ斯學ニ志ス者ノ一助ニ備フト云フ

- 一 此書簿記學起源考ヲ以テ名ク是レ通篇單ニ簿記學ノ起源及ヒ其沿革ヲ叙スルニ止マレバナリ若シ夫レ例題解式ニ至テハ則チ當サニ他日ヲ待テ詳論スル所アルベシ
- 一 此書記スル所一々皆ナ據ルトコロアリ然レドモ其引用書ノ如キハ悉ク之ヲ掲グルニ暇アラズ今僅カニ數種ヲ存シテ讀者ノ參考ニ供スルノミ

明治十九年九月

海野力太郎識」¹⁴⁾

この「例言」において、海野は、本書編集の要旨として、(1)当初は原書を抜粋して欧文の書を公刊するつもりであったが、簿記を学ぶ者の多くは訳書に拠っており原書に拠る者は少ないので、本書でも原書の大要を訳述することで簿記を学ぶ者の一助にしたいこと、(2)本書は簿記の起源と沿革の叙述にとどまるものであること、(3)本書の叙述にはそれぞれ根拠があるが、その引用文献のすべてを掲げる余裕はないので、数種の文献を示して参考に供するものであることを記している¹⁵⁾。

上掲の「例言」を承けて、海野は、「引用書目」において、本書を纂訳するにあたり彼が参考とした欧米文献を以下のように列挙し、それぞれの著者（あるいは、編者ないし出版者）の名前と著作の標題を示している。すなわち、

「 引用書目

- 一 リイ氏 ユニバーザル、ジクシヨナリー、ヲフ、アーツ、サイヤンセス、エンド、リテラチユアー
- 一 ナイト氏 インサイクロピヂア、ヲフ、ブリタニカ
- 一 ダビス氏 マゼマチカル、ジクシヨナリー
- 一 メヒウ氏 プラクチカル、ブツクキーピング
- 一 ブランデ氏 エ、ジクシヨナリー、ヲフ、サイヤンス、

- リテラチユアー、エンド、アート
- 一 ビートン氏 エ、ジクシヨナリー、ヲフ、ユニバーサル、インホルメーション
 - 一 ルーミス氏 ツリーチー、ヲフ、アルゼブラ
 - 一 カーター氏 プラクチカル、ブツクキーピング
 - 一 ホルソム氏 ロジカル、ブツクキーピング
 - 一 ベックマン氏 エ、ヒストリー、ヲフ、インベンションス、ジスコバリース、エンド、ラルジンス
 - 一 ハナホルド氏 ブツクキーピング、バイ、シングル、エンタリー
 - 一 ジャクソン氏 プラクチカル、システム、ヲフ、ブツクキーピング、バイ、ダブル、エントリー
 - 一 フリデート氏 アンセント、ヒストリー
 - 一 チャンバー氏 エ、ジクシヨナリー、ヲフ、ユニバーサル、ノーレツヂ、ホール、ゼ、ピープル
 - 一 コーランヂ氏 ポピユラル、エンサイクロピヂヤ
 - 一 イルスオース氏 シングル、エンド、ダブル、エントリー、ブツクキーピング、エンド、ビジ子ス、マニユアル
 - 一 トドハンター氏 イレメンツ、ヲフ、ユウクリット
 - 一 リプレー及ダナ氏 アメリカン、サイクロピヂヤ
 - 一 キツドル及スチーム氏 ゼ、サイクロピヂヤ、ヲフ、エジユケーション

以上

」¹⁶⁾

この「引用書目」に掲げられた19冊の欧米文献のうち、簿記の解説書はその標題から推測されるように、「メヒウ氏」(Ira Mayhew)、「カーター氏」(Frederic H. Carter)、「ホルソム氏」(Ezekiel G. Folsom)、「ハナホルド氏」

(Lyman B. Hanaford (and Jesse W. Payson)), 「ジヤクソン氏」(George Jackson), 「イルスオース氏」(Henry W. Ellsworth) の各著作(計6冊)にとどまる。他は、歴史書が、「ベックマン氏」(Johann Beckmann (John Beckmann))のものに加えて、「フリデート氏」(Peter Fredet)の著作(計2冊)、数学書が、「ダビス氏」(Charles Davies (and William G. Peck)), 「ルーミス氏」(Elias Loomis), 「トドハンター氏」(Isaac Todhunter)の各著作(計3冊)、および、辞書・百科事典が、「ライ氏」(Abraham Rees), 「ナイト氏」(Charles Knight), 「ブランデ氏」(William T. Brande (and Joseph Cauvin)), 「ビートン氏」(Samuel O. Beeton (and John Sherer)), 「チャンパー氏」(William Chambers and Robert Chambers), 「コーランヂ氏」(Leo de Colange), 「リプレー及ダナ氏」(George Ripley and Charles A. Dana), 「キツドル及スチーム氏」(Henry Kiddle and Alexander J. Schem)の各著作(計8冊)である。

要するに、「引用書目」に掲げられた19冊のうち、簿記書は6冊にすぎない。また、会計(簿記)の歴史を専門的に論じた文献は、わずかに「ベックマン氏」の「エ、ヒストリー、ヲフ、インベンションス、ジスコバリーヌ、エンド、ラルジンス」、つまり、ドイツの官房学者 Beckmann の科学史・技術史に関する論文集 *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen* (5巻(各巻4分冊、計20分冊)、1780~1805)の英語版、特にその第四版 (*A History of Inventions, Discoveries and Origins*, Vols.2, 1846)に収載された論稿(「イタリア式簿記」“Italian Book-keeping”)のみである¹⁷⁾。ただし、「カーター氏」の簿記書「プラクチカル、ブツクキーピング」、つまり、*Practical Book-keeping adapted to Commercial and Judicial Accounting*, …… (2nd ed., 1874)のみには、「序」(Introduction)において、簿記の歴史に関する簡単な言及が見出される¹⁸⁾。

したがって、これらの「引用書目」中の文献に依拠して簿記の歴史を叙述(纂訳)することには相当に困難な作業を伴ったであろうし、そのことが、簿記書の標題や著者たちの名前の羅列的叙述にとどまるという本書の限界を生み出す要因になったと考えられる。しかし、上掲の原書を個人で入手(蒐集)するこ

とそれ自体が容易でなかった明治期、特にその前半にあって、海野は、上掲の欧米文献を精力的に蒐集し、これらの文献からの抜粋をもって本書の主要部分としたのである。その当時の時代環境や会計史研究の状況を考えれば、このような試みだけでも、海野の『簿記學起原考』は、わが国における会計史研究の先駆的業績として十分に評価かつ尊重されるべきものと思量される。

なお、本書には、「引用書目」と「本文」との間の頁に、次のような「題辞」が掲げられている。すなわち、

“Knowledge is cubic, having length, breadth, and thickness.”¹⁹⁾

「知識は立体的なものであり、長さも、幅も、厚さも持っている」という上掲の文言は、海野の学問観、特に簿記の歴史を考察するにあたっての「簿記學」そのものに対する彼の考え方を端的に語ったものと言えるであろう²⁰⁾。

以下、『簿記學起原考』の「本文」の叙述内容について具体的に考察することにしよう。

Ⅱ - 4 本文

『簿記學起原考』の「本文」は、節や項などに区分されることなく、簿記の歴史が平板に叙述されている。しかし、本稿では、便宜的に、その歴史叙述を七つに分け、かつ、海野による行論の前後を多少入れ替えながら整理して、考察を進めていきたい。

1) 刊行の言葉

海野は、「本文」の冒頭に、1頁を充てて、特に標題は付していないものの、本書刊行の事情を述べた「刊行の言葉」を記している。すなわち、

「簿記學起源考

海野力太郎 纂譯

簿記學ノ起ル其由來スル所久シ唯ダ其久シキガ故二人之ガ濫觴ヲ知ル
モノ稀ナリ今西人簿記ヲ論スルモノ固ヨリ一ニヲ以テ數フ可カラズ而
シテ其言フ所大抵皆ナ貸借ノ理ヲ説キ例題ノ式ヲ解スルニ止マリ未ダ

嘗テ所謂簿記學ナルモノハ何ノ時ニ起リ何ノ人ニ成ルヲ詳ニセス是レ寧ロ流ヲ汲デ其源ヲ忘ル、モノニアラズヤ余嘗テ此ニ憾アリ自ラ揣ラズ頗ル其事ニ苦心スト雖ドモ而カモ未タ之ヲ蓋スコト能ハズ但ダ頃者諸書ヲ閲シ僅カニ其一斑ヲ窺フコトヲ得タリ依テ且ク之ヲ譯述シ以テ大方ノ高論ヲ待ツト云フ」²¹⁾

上掲した「刊行の言葉」の要旨をあえて敷衍すれば、簿記(学)の歴史は長く、それゆえに、その起源(濫觴)を知るものは稀である。簿記を論じて、概して貸借の原理を説き例題を解説することにとどまり、その起源や生成の詳細を明らかにすることがない。海野は、このことを遺憾として、諸種の文献を調査し、その一端を探ることができたので、これを訳述して大方の意見を待つことにしたいと記しているのである。

明治期の欧化政策の下で、輸入学問そのものであった洋式簿記(特に複式簿記)の導入当初の事情を考えれば、当時のわが国では複式簿記の技法の習得と運用に努めることに精一杯であり、その歴史にまで思い及ばなかったことは想像に難くない。『簿記學起原考』は、このような状況下で試みられた会計史研究(簿記史研究)の先駆的業績であり、上記の「刊行の言葉」は、海野の会計史研究に対する意気込みをまさに反映したものと考えられる。

2) 複式簿記の起源

『簿記學起原考』の本文は、上掲の「刊行の言葉」に始まり、これに続いて、簿記の歴史に関する本来の叙述が以後38頁にわたり展開される。

海野は、まず、簿記(特に複式簿記)の歴史を論じるにあたり、その起源を古代社会に求める所説があることに言及する。すなわち、「蓋シ簿記學ノ起ル其源頗ル昏晦ニシテ世ノ説ク所固ヨリ一定スルコト能ハズ或ハ云フ一千餘年ノ上古印度[インド]ノ婆尼亜パニヤン[振り仮名は原文のまま:banyan]人(ヒンヅー人ノ一種)[特殊なカーストに属し肉食をしないヒンドゥー教徒の商人]既ニ斯學ヲ知リテ第五世紀ノ頃初テ之ヲ邊尼斯ベニズ[ヴェネツィア]人ニ傳ヘリト或ハ云フ古代ノ亜拉比亞[アラビア]人ハ夙ニ簿記學ノ用法ヲ識テ之ヲ邊尼斯人ニ

傳派セリト或ハ云フ羅馬 [ローマ] 希臘 [ギリシャ] ノ人民ハ尤モ早ク此術ニ長シ當時ノ計簿往々欄ヲ左右ニ作りテ其収支ヲ分別セシコト恰モ今日ノ貸借ヲ左右ニ排置スルガ如クナリシト・・・」²²⁾と記している。

このように、海野は、複式簿記の淵源を、古代インドや、アラビア、あるいは、古代のギリシャやローマに求める所説があることを示すが、彼自身は、これらの所説を採ることなく、「・・・簿記學ノ起ル遠ク上世ニ在リト雖ドモ而カモ其伊太利 [イタリア] ニ入テ初テ具備セルコトハ蓋シ疑ヲ容レザル所ナリ・・・」²³⁾と述べて、複式簿記の起源をイタリアに求める所説を支持している。

続けて、彼は、「引用書目」に掲げられた Beckmann の論稿に基づき、Adam Anderson²⁴⁾の説くとともに、「簿記ノ學其源ヲ伊太利ノ市中ニ發シタルコト疑フベカラズト雖ドモ若シ然ラズトセハ尚ホ此國ニ入りテ初テ其衰運ヲ挽回シタル者ニシテ即チ當時各種ノ代數學ヲ教授セシベニス [ヴェネツィア] 府中ニ流行セシコト尤モ信スルニ足レリ而シテ所謂複式即チ商賣記簿 (メルチャント, アツカオンツ) [merchants accounts] ナル者ハ其源ヲ代數學ノ定則ニ採リタルモノニシテ其始テ代數學ヲ出版セシハ則チ夫ノ「セント、フランシス」位ノ僧リウカス、ジー、バルゴー [Lucas de Burgo] ナリト」²⁵⁾と記している。

すなわち、海野は、Beckmann の所説と同様に、と言うよりも、彼の所説に拠って、複式簿記がその起源をイタリアに発すること、つまり、中世末期以来の地中海貿易により大いに繁栄したイタリア商業都市に複式簿記の起源を求める中世イタリア起源説を採ることを明らかにするとともに、イタリア諸都市の中でも、特に当時に各種の代数学が教授されていたヴェネツィアでそれが流布していたことは疑いないこと、また、複式簿記の根源は代数学の原理 (定則) にあり、「リウカス、ジー、バルゴー」、つまり、Luca Pacioli (姓のみで表記する場合には“Paciolo”)²⁶⁾が、代数学 (複式簿記を含む) の著作を初めて出版した人物である旨を指摘しているのである。

さらに、海野は、Beckmann の論稿を引用しつつ、「抑モ簿記學ノ起源ハ「ドビヤ、スクリツラ」 [Doppia scrittura] ナル伊太利語並ニ斯學科上今日尚ホ

慣用シ來リテ現ニ各國語中ニ存在セル所ノ數語ニ徴シ其正シク伊太利ニ權輿セシヲ知ルベシ而シテ當時東印度 [東インド] ノ貿易悉ク伊太利ニ集合セシヲ以テ其他邦ノ人民ハ往々伊太利商家ニ就テ各種ノ簡便ナル計算法及ヒ所謂簿記ノ術ヲ傳承セシコト蓋シ尤モ信ズベシト」²⁷⁾と記し、「ドピイヤ、スクリツラ」という名称や用語から、複式簿記がイタリアに起源を持つこと、そして、東インド貿易の中心がイタリアであり、他国の商人はかかる貿易関係を通じて簿記の技術をイタリアから伝承したことは疑いないと述べている。

そして、彼は、「以テ簿記學ノ伊太利ニ一緣故アルヲ知ル可シ蓋シ彼ノ千五百年代ノ頃ハ伊國ノ商業尤モ隆盛ニシテ簿記ノ術マタ大ニ國內ニ流行シ夫ノベニス及ビゼノア [ジェノヴァ] 等北部ノ諸府ニ至テハ即チ皆ナ競フテ之ヲ用ヒタリト云ヘリ・・・」²⁸⁾と述べるとともに、「引用書目」中に掲げる Peter Fredet の *Ancient History*;・・・からの文言を引用した後に²⁹⁾、「・・・我カ簿記ノ學其源ヲ伊太利ニ發スト云フモノ誠ニ其理アルヲ見ルベシ・・・」³⁰⁾と結んでいる。

3) 複式簿記の理論

次に、海野は、Anderson の文言、つまり、「・・・夫レアンデルソン氏既ニ簿記學ノ原理ヲ以テ之ヲ代數學ノ定則ニ淵源セリト云ヘリ・・・」³¹⁾を改めて引用した後に、複式簿記の基本原則を代数式を用いて簡潔に解説している。これは、『簿記學起原考』の全体を通じて、複式簿記の原理的説明が教示される唯一の箇所である。

すなわち、「・・・今其所謂損益資本ノ關係及ビ貸借ノ作用ヲ觀ルニ即チ皆ナ悉ク數學上ノ文字ヲ以テ容易ニ之ヲ證明スルヲ得ベシ茲ニ其要領ヲ擧ケンニ簿記學ニ云フ所ノ開帳ノ純資本 (ゼ、子ツト、ストック、エト、オペニング、ゼ、ブツク) [the net stock at opening the book] ハSヲ以テ之ヲ表スベク其開帳ノ損益 (ゼ、ゲイン、エンド、ロツス、エト、クローシング、ゼ、ブツク) [the gain and loss at closing the book] ハPヲ以テ之ヲ顯ハスベシ而シテ其所謂殘高勘定ノ貸借ハ即チDCノ二文字ヲ以テ各之ヲ甄別スルヲ得是レ簿記學ノ原理ハ之ヲ代數學ニ取ル所以ニシテ其應用ハ即チ當ニ左ノ如クナルベシ」³²⁾と述べ

て、以下に掲げる代数式を用いて複式簿記の基本原則を説明している。

「 S = 帳簿開始ノ純資本

P = 帳簿閉終ノ損益

D = 残高勘定ノ借方

C = 残高勘定ノ貸方

S ± P = N = 帳簿閉終ノ純資本

D - C = N = 残高勘定貸借ノ差 }
即チ純資本

故

ニ

D - C = N

故

ニ

D = N + C

ナ

リ

」³³⁾

すなわち、海野は、簿記の目的ないし課題を純資本（純財産）の確定計算にあると措定し、複式簿記が、純資本を計算するための二つの方法、つまり、上掲の等式のうち、(1) < S ± P = N > で示される方法、つまり、S（「帳簿開始ノ純資本」または「開帳ノ純資本」）にP（「帳簿閉終ノ損益」または「閉帳ノ損益」）を加減することによりN（「帳簿閉終ノ純資本」）を計算する方法と、(2) < D - C = N > で示される方法、つまり、D（「残高勘定ノ借方」（=資産））からC（「残高勘定ノ貸方」（=正しくは「残高勘定ノ貸方」のうちの負債の部分））を控除することにより、その差額、つまり、N（「帳簿閉終ノ純資本」）を計算する方法を包含するものであることを明らかにしている。端的に言えば、期間計算を前提として、< 期首資本 ± 期中損益 = 期末資本 > と < 期末

資産 - 期末負債 = 期末資本 > という二つの等式で示される、期末資本 (純財産) の二重計算が提示されているのである。

このように、簿記の目的が損益計算ではなく財産計算にあるとする観点から、複式簿記の基本原理を、財産 (資本) の全体はその構成部分の総和に等しいという「均衡の原理」(Principle of Equilibrium) に基づき、代数的な等式関係 (具体的には資本等式) を用いて説明する方法は、イギリスの簿記書では Frederick W. Cronhelm の *Double Entry by Single*, …… (1818) に先駆的に見出されるところである³⁴⁾。また、アメリカの簿記書においても、Thomas Jones の *The Principles and Practice of Book-keeping*, …… (1841) では、海野が掲げる上記の二つの等式で示されるのと同様な純財産の二重計算が複式簿記の基本命題として言及され、これに基づく二勘定分類が提示されている³⁵⁾。さらに、先の「引用書目」に掲げられている Ezekiel G. Folsom の *The Logic of Accounts*; …… (1873) では、このような純財産の二重計算が、勘定分類、そして、かかる計算を担う財務諸表の様式にまで体系づけられて解説されている³⁶⁾。

このような、損益の二重計算でない、純財産の二重計算を簿記の目的とする思考、つまり、資本主理論的勘定学説 (proprietorship theory of accounts) — 一物的二勘定系統説 (materialistische Zweikontenreihentheorie) (または純財産学説 (Reinvermögenstheorie))³⁷⁾ のわが国への本格的導入がもっぱらドイツ語圏における Friedrich Hügli や Johann F. Schär の学説の紹介を通じてであることを考えるならば、海野の所説は、その論拠がいずれに由来するのかわからずとも明らかではないが、彼の時代を一步抜き出した内容のものであったと言えよう³⁸⁾。

4) 15世紀～16世紀

海野は、Paciolo を簿記著述者の「鼻祖」(始祖) として論及する。すなわち、「…然レドモ古來世ノ學者ハ概子皆ナリウカス、ジー、バルゴー (或ハリウカス、パシララストモ云フ) ヲ以テ我カ簿記學著述者ノ鼻祖ト爲セリ蓋シ氏ハ千四百年代ニ在テ尤モ有名ナル數學者ニシテ夫ノ亞拉比亞語ノ代數學ヲ翻譯セシハ則チマタ此人ナリト云フ氏ハ本ト「セント、フランシス」位ノ僧官ニシ

テ伊太利國ノフローレンチン [フィレンツェ] 領ベルビー [ウルビーノ (Urbino)] 公ノ采地バルゴー、エス、セーブチロ [以前は Borgo Santo Sepolcro—現在の Sansepolcro] ト云ヘル都邑ニ在リシヲ以テ世人ハ或ハ氏ヲ呼ブニ則チ此邑名ヲ冠セリ而シテ氏ガ簿記學ノ著述ハ實ニ千四百九十五年 [正しくは1494年] ヲ以テ初テ世ニ出デタリ・・・」³⁹⁾と記している。

しかしながら、彼はまた、「・・・佛人ラ、ボルテ [Matthieu de la Porte] 乃チ氏ガ其著述ノ備ハラザルヲ痛論シ且ツバルゴー氏ノ前既ニ簿記ノ著述者アルヲ證明シテ曰ク千四百九十五年ノ頃伊太利ノ人プロザー、ルーキナル者其國語ヲ以テ簿記學ノ書ヲ著ハセシモノ是レ則チ簿記學ノ主意ニ就テ初テ註釋ヲ下シタル歐洲最初ノ記者ニシテ余ガ知ル所ノ第一ノ者ナリト然レドモプロザー、ルーキノ事今之ヲ舊誌ニ求ムルニ一モ記スル所ナシ乃チ知ルラ、ボルテノ言マタ未ダ蓋ク信スベカラズ・・・」⁴⁰⁾とも述べている。

上記のように、海野は、Paciolo の名前について、先には「リウカス、ジー、バルゴー」(または「リウカス、パシヨラス」)、ここでは「プロザー、ルーキ」と言及しており、同一人物の名前をあたかも別人であるかのように記している。

さて、Paciolo の「簿記論」以後、イタリアでは、Domenico Manzoni, Alvise Casanova, Giovanni A. Moschetti らによって複式簿記 (= イタリア式簿記) の解説書が出版されるが⁴¹⁾、海野はこれらのイタリア簿記書に言及するところがなく、むしろ、Paciolo の「簿記論」を継ぐものとして、ドイツの簿記書を取り上げている。すなわち、「・・・バルゴ氏ニ繼テ又尤モ久キモノハ日耳曼 [ゲルマン] ノゴットリーブ [Johann Gottlieb] 氏トス蓋シ氏ノ書ハ千五百三十一年・・・同國ニウレンベルグ [ニュルンベルク] 府ニ於テ出版シタル者ニシテ・・・」⁴²⁾と。

ただし、ここで言及されている1531年刊行の Gottlieb の簿記書 *Ein deutsch verständig Buchhalten* …… は、複式簿記 (= イタリア式簿記) ではなく、ドイツ固有の簿記 (= ドイツ式簿記) を解説したものであり、ドイツにおける複式簿記の解説書は、Wolfgang Schweicker の簿記書 *Zwifach Buchhalten*, ……

(1549) の刊行を待たなければならない。しかしながら、この Schweicker の簿記書に対する言及を『簿記學起原考』に見出すことはできない⁴³⁾。

次に、海野はイギリスに目を転じる。「……英國ニ於テハ則チ千五百四十三年ヒウグ、オールドカスツル [Hugh Oldcastle] 氏龍動 [ロンドン] 府ニ於テ初テ一書ヲ印行セリ世ニ之ヲ英國最古ノ簿記書ト云ヘリ……」⁴⁴⁾と述べ、また、「……尋テ千五百六十九年龍動ノ商人ゼームス、ピール [James Peele] ナル者一書ヲ印行シテ大ニ斯學ヲ唱ヘリ……」⁴⁵⁾と記すとともに、「余 [Peele] カ數多ノ商人ニ教授セシ所ノ簿記法ハ我カ英國ニ於テハ固ヨリ新規ニ属スト雖ドモ而カモ此法ノ他邦ニ行ハル、ヤ既ニ久シト」⁴⁶⁾と述べている。

すなわち、海野は、イギリス最古の複式簿記解説書の著者として Oldcastle の名前を挙げるとともに、1569年に刊行された Peele の簿記書 *The Pathway to Perfectnes*、……についても論及している。ただし、彼は、Beckmann の行論に依拠しているためか、これに先行する Peele の別の複式簿記解説書、つまり、*The maner and fourme* …… (1553) に対する言及は見出されない。

なお、彼は、Beckmann の所説に拠り、「……今アムシ [Joseph Ames]⁴⁷⁾ 氏ノ古書 (タイポグラフィカル、アンチクイチャー [Typographical Antiquities: ……]) ヲ按スルニピールノ事一モ記スル所ナシ然レドモ其第四百十葉ニ於テジョン、メルリス [John Mellis] ノ著書ヲ引用シテピールノ前既ニ世ニ流行セシ法式アルヲ證明セリ蓋シ所謂メルリスノ書ナルモノハ千五百八十九年 [正しくは1588年]⁴⁸⁾ ヲ以テ初テ世ニ出ツト雖ドモ其實ハ千五百四十三年龍動府出版ノ舊本 (即チオールド、カスツル [原文のまま] 氏ノ著) ニ據テ更ニ訂正増補シタル者ナル故ニメルリスハ其巻端ニ書シテ曰ク」⁴⁹⁾と記し、さらに続けて、「此書ハ千五百四十三年八月十四日龍動府出版ノ舊本ヲ増補改版シタル者ニシテ固ヨリ我カ鉛槧ノ功ニ成ルモノニアラズト」⁵⁰⁾と述べている。

すなわち、彼は、1588年に刊行された Mellis の簿記書 (*A briefe instruction* ……) が、Peele の簿記書に先行して1543年に刊行された Oldcastle の簿記書——ただし、それは、現在のところ「幻の書」となっている——を実質的に増

補・改訂したものである旨を明らかにしているのである。

5) 17世紀

17世紀の簿記事情、特にイギリスのそれについて、海野は、「・・・英國龍動ノ商人ニジョンコルリス [原文のまま] 或ハコルリス [John Collins] ナル者起リ大ニ斯學ヲ振起セリ蓋シ其ノ書千六百五十二年 [正しくは1653年] 商家勘定手引書 (エン、イントロダクション、ツー、メルチャント、アツカオント) [*An introduction to merchants accounts*,・・・ (1653)] ノ名ヲ以テ世ニ顯レタル者ニシテ實ニ英國簿記書ノ泰斗ナリ尋テ千六百八十四年アレキサンドル、リセツト [正しくは“Abraham Liset”] ノ計算家寶典 (ゼ、アツカオンタント、クローセツト) [*Amphithalami, or, The Accomptants Closet*:・・・ (1660)] 及ビリチャード、ダツフホルン [Richard Dafforne] ノ商人鏡 (ゼ、メルチャント、ミロー) [*The Merchants Mirrour*:・・・ (1635)] 等數種ノ著アリ然レドモ皆ナ遂ニ世ニ用ヒラレズシテ止ム甚タ惜ムベシ・・・」⁵¹⁾と記すのみである。

むしろ、17世紀を代表する簿記の解説文献は、イギリスではなく、ネーデルラント(「低地地方」:現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルクのベネルクス三国に北フランスの一部を加えた地域)に登場する。かつてのイタリアに代わりヨーロッパ経済の中心となったネーデルラントでは、既にその経済的興隆に伴って、イタリア以外で複式簿記を解説した最初の簿記書とされる Jan Ympyn の *Nieuwe instructie*・・・ (1543) を嚆矢として⁵²⁾、海野が『簿記學起原考』で取り上げている Valentin Mennher や Nicolaus Petri (Claes Pietersz) などの簿記書が出版されている⁵³⁾。しかし、その中で最も着目すべきは、商業簿記のみならず、公会計(領土管理)への複式簿記の適用を論じた Simon Stevin の「簿記論」(*Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche Wyse*・・・ (1607))であろう。

海野は、まず、「・・・佛蘭西 [フランス、ただし、正しくはネーデルラント] ニ於テハ則チ千六百二年 (或ハ云フ千六百七年) シモン、スチーブン [Simon Stevin] 氏 (或ハシモン、スチビニウースト云フ) ノ・・・其書通篇複式ノ組織ヲ論ジ始ハ則チ其所謂複式ナル者ヲ政府勘定ニ適用スル利害ニ就テ之ヲ問答

シ中ゴロハ則チ貸借ノ原理勘定ノ性質等各種ノ説明ヲ詳ニシ終ハ則チ仕譯及ヒ原簿ノ雛形ヲ掲ケ且ツ之ニ簡單ナル例題ヲ附シテ以テ備サニ諸帳連環ノ活用ヲ示シ併セテ其貸借平均ノ方法ヲ詳論セリ故ニ複式ノ綱領ハ略ボ此書ニ蓋セリト云ヘリ・・・」⁵⁴⁾と説き、特に上掲のように、「・・・複式ノ綱領ハ略ボ此書ニ蓋セリト云ヘリ・・・」とまで記して、Stevinの「簿記論」を高く評価している。

そして、海野は、Backmannの行論にしたがって、「・・・佛蘭西[ここでも正しくはネーデルラント]ニ於テハ千六百四年モウリス[Maurits van Nassau]親王⁵⁵⁾始テ伊式[イタリア式簿記]ノ良法ニ頼テ大藏出納ノ計算(トリジュヤリー、アツカヤント)[treasury accounts]ヲ整理シタルモノ是レ則チ歐洲最古ノ一例ナルベシ・・・」⁵⁶⁾と記し、彼の言う「政府勘定」、つまり、公会計(領土管理)への複式簿記の適用を企図したStevinの手續の概要を、次のように記述している。すなわち、

「・・・今此ニ其法ヲ按スルニ三人ノ大臣ト三箇ノ勘定トヨリシテ成リタル者ノ如シ及チ之ヲ左ニ掲ク

- 一 ク子イストル大臣 [quaestor] 領地租税ノ収入ヲ掌ル
- 一 アクセプトル大臣 [acceptor] 本地租税ノ収入ヲ掌ル
- 一 セサラリウス大臣 [thesaurarius (treasurer)]

仕拂總勘定ヲ掌ル

モウリース親王カ其本属兩地ノ租税ヲ收入スルニ當テヤ即チ此ノ如ク其收入方ニ二人ノ大臣ヲ置キ又其仕拂方ニ一人ノ大臣ヲ置テ以テ一州經濟ノ要路ニ當ラシメ而シテ其以下ノ属吏ニ至テハ即チ唯タニー紙ノ月表(モンズリー、イキストラクト)[monthly extracts]ヲ作テ之ヲ上局ノ長官ニ奉呈シテ一箇月間ノ共計ヲ報告セシメ以テ元簿登記ノ材料ニ充テタリト云フ・・・」⁵⁷⁾

さらに、海野は、上記のStevinの「簿記論」、特に複式簿記の公会計への適

用に関する叙述を続けて、フランスの事例についての Beckmann の所論を紹介する。

すなわち、「・・・クリツプステイン [Philipp E. Klipstein] 氏ハ佛國財政要覽 (エン、インクワイリー、インツ、ゼ、フハイナンス、ヲフ、フランス) [*An Inquiry into the Finances of France*]⁵⁸⁾ ト云ヘル一書ヲ引テヘンリー四世 [Henri IV (在位1589~1601)] カ在位ノ頃頗ル其意ヲ複式ニ用ヒタルコトヲ證明セリ然ルニベックマン氏ハ之ヲ評シテ曰ククリツプステインノ斯言未タ信ヲ措クニ足ラズト余ハ却テベックマンノ言ヲ信ゼザルナリ何ゾヤヘンリー四世ノ朝ニハ則チスウリー公 [Duke of Sully (Maximilien de Béthune)] 在テ存スレバナリ蓋シスウリー公ハ當時股肱ノ臣ニテ實ニ其一言一語能ク四世ガ心意ヲ動スノ權勢アリテ而カモ又簿記學熱心ノ政事家ナレバナリ其後コルベルト [Jean-Baptiste Colbert] 公⁵⁹⁾ (是レマタ佛國有名ノ政事家ニシテルイス十四世 [Louis XIV (在位1643~1715)] ノ朝ニ仕フ) ノ時ニ至テ複式採用ノ議マタ甚ダ盛ナリシト云フ]⁶⁰⁾ と。

叙上のように、海野は、複式簿記の公会計への適用については、Beckmann の所論に拠りながら、他の箇所と比べて相対的に詳しく叙述している。ただし、彼が、果たして、複式簿記の公会計への適用問題に関して、官房学者の Beckmann と同様の問題意識を持ってこれを叙述していたのか否か、この点については、海野の行論から窺うことはできない⁶¹⁾。

6) 18世紀

これまでの考察において、海野がその歴史叙述の底本としていた Beckmann の論稿 (「イタリア式簿記」) ではその考察の範囲は17世紀までにとどまっている。しかながら、海野は、18世紀以後の簿記事情についても、Beckmann の論稿以外の文献に依拠しながら検討を進めている。それは、もっぱらイギリス (スコットランドを含む) で出版された簿記書についての考察である。

彼は、まず、18世紀前半の簿記書を取り上げ、「・・・千七百二十六年ニ至リチャーレス、ホットン [正しくは“Edward Hatton”] ノ商人必携 (ゼ、メルチャント、マゲージン) [*The Merchant's Magazine*:..... (1726)] 始テ世人ノ

賛成ヲ得タリト云フ而シテホットンニ後ル、正ニ四年（正しくは5年）ニシテ又マルコーム [Alexander Malcolm] 氏ノ著述アリ其書 [A *Treatise of Book-keeping*, …… (1731)] 諛博ニシテ紙葉殆ント六百五十二及ブ學士オーガスタス、モルガン [Augustus de Morgan] 大ニ之ヲ稱セリ降テ千七百三十八年 [正しくは1736年] ニ至リ蘇格蘭 [スコットランド] ノペルス [パーズ (Perth)] 府ニ於テジョン、メイヤー [John Mair] 又一書ヲ印行シテ簿記學原規即チ「ブックキーピング、メソヂダイズド」 [Book-keeping Methodiz'd: …… (1736)] ト名ケタリ蓋シ氏ハペルス府小學 [Perth Academy] ノ教授ニシテ其書尤モ能ク當時ノ稱賛ヲ得タリ後チ屢々改版シ千七百六十八年 [正しくは1773年] ニ及テ終ニ簿記學新論（ブック、キーピングモデルンナイズド） [原文のまま：Book-keeping Moderniz'd: …… (1773)] ト更名セリ…⁶²⁾と説いている。

18世紀のイギリス、特にスコットランドでは、イングランドとの統合（1707）による経済力の高まりとともに、簿記・会計を含む実学教育中心の「アカデミー」(academy) と呼ばれた専門学校が設立される。そして、このような実学志向の学校における人材育成のための教育を念頭に置いた教科書として、Malcolm や Mair らの簿記書が刊行される。これらの簿記解説書は、イタリア式簿記の伝統をふまえつつ、これを理論的・体系的に整序した優れた内容のものであったが⁶³⁾、海野は、これらの簿記書の内容そのものについて言及することはなく、上記のように、著者たちの名前と簿記書の標題とを列挙するのみである。

続けて、海野は、「…蓋シメイヤー氏ト其時ヲ前後シテ譽アルモノハウエブストル [William Webster] 及ヒジエームス、トブソン [正しくは“James Dodson”] 等マタ數名アリ殊ニトブソンノ如キハ則チ簿記法精規（ゼ、メソツト、ラブ、ブックキーピング、レヂウズド、フロム、クリーヤー、プリンシブル） [The Accountant, or, the method of Book-keeping, deduced from clear principles, …… (1750)] ト云ヘル複式ノ一篇ヲ著シテ備サニ伊太利派簿記ノ至要ヲ詳論シ以テ廣ク其書ノ採ルベキヲ示セリ而シテ當時ノ商民終ニ氏カ説ヲ容ル、ノ明ナクトブソン多年ノ苦心空シク水泡ニ属セリ嘆ズベキナリ…⁶⁴⁾

と記している。

さらに、18世紀後半の簿記事情について、彼は、「・・・尋テ千七百五十八年ダウン [Benjamin Donn] 氏以来ウストン [William Weston] ゾウリング [Daniel Dowling] テイロル [William Taylor] ジルラース [Thomas Dilworth] クーク [John Cooke] セツケル [John Sedgers] 等有爲ノ諸氏相繼テ輩出シ・・・」⁶⁵⁾と述べている。

これらの簿記書についても、海野は、もっぱら Webster や Dodson, あるいは, Donn, Weston, Dowling, Taylor, Dilworth, Sedger といった簿記書の著者たちの名前と、場合によりその標題を列挙するだけである。

ただし、海野は、18世紀末のイギリスで刊行された二つの簿記書、つまり、Benjamin Booth の *A Complete System of Book-keeping, ……* (1789) と、Edward T. Jones の *Jones's English System of Book-keeping, by Single or Double Entry, ……* (1796) については、多少ともその内容に踏み込んだ叙述を行っている。

まず、Booth の簿記書について、海野は、「・・・遂ニ千七百八十九年ベンジャミン、ブース [Benjamin Booth] ナル者起レリ氏ハ本ト英國龍動府ノ商人ニシテ夙ニ意ヲ斯學ニ潜メ大ニ之ガ改良ヲ企圖シタリ嘗テ英國ニ簿記ノ良書ナキヲ嘆シテ曰ク」⁶⁶⁾と記し、当該簿記書の「序論」(Introduction) 中の文言を引用して、「我カ國ノ如キ商業隆盛ノ土地ニシテ尚ホ未タ夫ノ商賣ノ大分部ニ應用シテ [傍点は筆者が追記] 能ク其實際ノ活用ヲ全フスル所ノ簿記書アラザルハ誠ニ慨嘆スベキ至ナリ惟フニ是レ他ナシ今日民間梓行スル所ノ書タル多クハ所謂實際ニ明カナラザル人若クハ事業ニ經驗ナキ人ノ著述ナレバナリト」⁶⁷⁾と述べ、Booth の簿記書刊行の目的を明らかにしている。

そして、海野は、「故ニ氏カ簿記學大全 (エ、コムプリート、システム、ヲフ、ブック、キーピング) [原文のまま: *A Complete System of Book-keeping, ……*] ヲ著述スルニ當テハ則チ頗ル意ヲ此ニ用ヒテ通篇ノ議論悉ク之ヲ實際ニ採リ遂ニ夫ノ仕譯日記ノ二帳ニ據テ簿記學自然ノ活用ヲ明カニシ以テ大ニ伊太利派簿記ノ面目ヲ一新セリ是レ世ニ氏ヲ稱シテ伊太利派中興ノ法主 [傍点は原文のま

ま] ト爲ス所以ナリ・・・」⁶⁸⁾と説いている。

すなわち、Paciolo の「簿記論」以降のイタリア式簿記 (= 複式簿記) の伝統を継承した Mair らの教科書的簿記書に対して、Booth の簿記書は、イタリア式簿記の枠内ではあっても、それを帳簿組織の改良 (特に分割仕訳帳制 (特殊仕訳帳制) の採用等) を機軸として革新したもので、つまり、折からイギリスで自生的に進行しつつあった工業化 (industrialization) の流れ、いわゆる「産業革命」(Industrial Revolution) の渦中において、従来のイタリア式簿記を大規模商業経営に適した近代的な会計記録法へと脱皮させるべく企図されたものである。かかる実践的簿記書の刊行を目指した Booth について、海野は、上記のように、特に「・・・伊太利派中興ノ法主・・・」と記して、高く評価しているのである⁶⁹⁾。

他方、Jones は、従来のイタリア式簿記を批判し、これに代わる新たな簿記法としての「イギリス式簿記」(English system of book-keeping) を提案し、当時の斯界に大きな論議を呼び起こした人物である。

この新式簿記法について、海野は、次のように述べている。まず、「・・・當時ブリストル港ニ一ノ商人起リ大喝一聲痛ク伊太利派ノ簿記ヲ排斥シタリ是レ所謂エドワード、デー、ジヨンス [Edward T. Jones] ナリ蓋シジヨンスハブリストル府 (英國第三ノ開港場) ノ勘定役 [Accomptant]⁷⁰⁾ ニシテ其職務常ニ帳簿ヲ檢閲セリ故ニ破産倒行ノ慘狀ヲ見ル毎ニ則チ其記帳法ノ甚タ備ラザルヲ嘆シ慨然トシテ之ヲ矯正スルノ志アリ今其改良ノ要旨ヲ聞クニ曰ク伊太利派ノ簿記タル其式精ニ似テ精ニアラズ寧ロ誤謬ヲ避クルノ道甚タ狹隘ニシテ夫ノ所謂貸借ノ決算ニ至テハ則チ實ニ非常ノ煩勞ヲ要シ且ツ縦令ヒ幸ニシテ之ガ平均ヲ得ルモ未タ是ヲ以テ其貸借決算ノ正確ナルモノト爲スベカラズ是レ伊太利派簿記ノ甚ダ備ラサル所以ナリ豈ニ之ヲ廢シテ別ニ一派ヲ建ツルノ便且ツ正ナルニ如シヤト・・・」⁷¹⁾と述べる。

続けて、彼は、「・・・遂ニ千七百九十六年新式簿記法一篇ヲ上梓セリ世ニ是ヲ英吉利西 [イギリス] 派簿記法ノ始祖 [傍点は原文のまま] ト云フ當時英國ノ人民ハ皆氏カ著述ニ目属シ其書一タビ出ツルヲ見レハ則チ英國商業ノ景況

ハ爲メニ一變スルノ思ヲ爲セリ故ニ氏ガ豫約出版ヲ公告スルニ及テ未タ數日ナラザルニ忽チ數百金ヲ集ムルヲ得タリ因テ氏ハ官ニ稟シテ之ガ專賣特許ヲ請ヒ以テ大ニ將來ノ改良ヲ期セリ・・・」⁷²⁾と記している。

さらに、海野は、「・・・蓋シ其書千七百九十六年以來數回ノ改正増補ヲ經テ千八百三十一年ニ至リ遂ニ一大新書トナレリ是レ氏カ三十餘年ノ經驗ニ成ルモノニシテ世ニ簿記學例解(ゼ、サイヤンス、ヲフ、ブック、キーピング、エキザンプリフワイド) [*The science of book-keeping exemplified* …… (1831)]ト稱スル者實ニ是ナリ・・・」⁷³⁾と述べるが、Jones の説く「英吉利西派簿記法」、つまり、「イギリス式簿記」は、かかる新式簿記法に対する彼の熱意と努力にもかわわらず、大方の期待を裏切る結果しかもたらさなかった。

この点について、海野は、「・・・然ルニ其書不幸ニシテ終ニ英國商民ノ^{ニクベクテンシヨシ}希望ニ[振り仮名は原文のまま]ニ適セズ忽チ社會ノ一大議論ト爲リ甲難シ乙駁シ今ハ却テ伊太利派舊式ヲ主張スルモノ陸續輩出シテジヨンスガ一身全ク重圍ノ中ニ陥リ孤城落日マタ憐ムベキノミ此時ニ當テミル [James Mill] 氏⁷⁴⁾一方ニ起リテ即チ大ニ兩黨ノ間ニ周旋シ遂ニジヨンスカ引用セル材料ヲ採テ之ヲ日記、仕譯ノ二帳ニ編製シ以テ備サニ伊英二式ノ優劣ヲ比較シー刀兩斷ノ下乃チ伊式ノ善良ヲ發明シ大ニジヨンスカ持論ノ非ナルヲ排斥シタリ是ニ於テカ兩黨ノ争ヒ漸ク歇ンデ數年ノ勝敗始テ一決セリ世ニ是ヲ複式ノ凱旋 [傍点は原文のまま] (トリヤンプ、ヲフ、ダブル、エンタリー) [the triumph of double entry]ト云ヘリ・・・」⁷⁵⁾と記している。

その上で、海野は、「・・・爾來ジヨンスノ説全ク地ニ墮テ世人翹企ノ希望空シク烟霧ニ帰シ了レリ余西史ヲ讀ンテ此ニ至ル毎ニ未タ嘗テ氏カ爲メニ之ヲ惜マズンバアラザルナリ之ヲ要スルニ伊英二式ノ争ハ實ハ我カ簿記學上一大進歩ヲ促カシタル者ニシテ今日吾人カ伊式ノ良法ニ由テ能ク商業社會ノ秩序ヲ保ツ所以ノモノハ真ニジヨンスガ賜ナリ吾人何ゾ之カ爲ニ感泣セザランヤ・・・」⁷⁶⁾と結んでいるのである。

要するに、Jones によるイタリア式簿記に対する急進的な批判と挑戦、そして、これに代わる新式簿記法としての「イギリス式簿記」の提案は、会計史上、

珍しいほどの論議を呼び起こすことになった。結果として、かかる論議は、Jones の「イギリス式簿記」の欠点を露呈させ、会計記録法としてのイタリア式簿記、つまり、複式簿記の優位性を改めて確認させることになる。まさに海野が記すように、「トリヤンプ、ヲフ、ダブル、エンタリー」⁷⁷⁾が明らかになったのである。

このように、Jones の「イギリス式簿記」は、会計の歴史上、一つの「徒花」に終わるが⁷⁸⁾、しかし、彼が新式簿記法を企図した背景には、先の Booth の場合と同様に、伝統的なイタリア式簿記（＝複式簿記）を当時の大規模商業経営に適したものの近代化を求める時代的要請があった。Jones の企図は失敗に帰したが「Edward Jones の物議を醸した著作とともに、われわれは近代的簿記の時代（the era of modern bookkeeping）に入る」⁷⁹⁾と言われるのである。

7) 19世紀

19世紀の簿記事情について、海野は、まず、「蓋シケーリー [Patrick Kelly] ノ書千八百一年簿記學元論（ゼ、イレメント、ヲフ、ブツク、キーピング）[原文のまま：*The Elements of Book-keeping*, …] ノ名ヲ以テ初テ世ニ出テシヨリ ローライン [William Lorraine] モリソン [Clerk Morrison] ホットン [Charles Hutton] 等有名ノ學士マタ相踵テ起リ爾來我カ簿記學ノ繁榮實ニ昔日ニ倍蓰セリ・・・」⁸⁰⁾と述べ、当時のイギリスの簿記書の著者たちの名前を挙げる。

そのうち、特に Kelly について、彼は、「・・・其説尤モ能ク世ニ容レラレ屢々顰刻アリ然レドモ其書唯タ簿記學近代ノ進歩ヲ示スニ在テ深ク學理ノ説明ニ及ハズ・・・」⁸¹⁾と記して、Kelly の簿記書は、複式簿記の近代化を示すものであるが、学理の深い説明には及んでいないと述べている。

続けて、海野は、「・・・千八百二年二月刊行ノ ニコルソン [William Nicholson] 氏哲學雜誌 [*Nicholson's Philosophical Journal*：より正確には *Journal of Natural Philosophy, Chemistry, and the Arts*]・・・」からの引用として⁸²⁾、「時勢ト實際トノ必用」^{【セシチー】}「振り仮名は原文のまま」ヨリシテ起リタル

簿記學上ノ改良ハ固ヨリ其複式ノ根本ヲ改ムニ非ラズ唯ダ從來ノ勘定製理法及ヒ分業法ヲ改良シ以テ其商業ヲ自在ナラシムルニ在リ是レ猶ホ製造家ノ分業法ニ依テ其業ヲ擧グルガ如シ今余(ケーリー)ガ論スル所ノ要點ハ則チ亦此改良ヲ示スニ外ナラザルナリ乃チ日記簿ノ如キ之ヲ數種ノ補助簿ニ區別シテ各其擔任ノ記録トシ而シテ每一帳ヲ一箇月間ノ取引ニ分チ以テ仕譯上若干ノ手數ヲ省クモノ則チ是ナリ然レドモ其改良ノ利益ハ獨リ茲ニ止マラズ夫ノ元簿登記ニ於テ特ニ其功ノ著シキヲ見ルベシ是レ他ナシ現金、手形、手數料、保險料及ヒ利息ノ如キ皆ナ一箇月間ノ合計ヲ以テ直ニ之ヲ元簿ニ組入ル、ヲ得ベケレバナリ今是ノ如ク煩勞ヲ省キ重複ヲ減スルハ則チ今日我カ商家一般ニ使用スル所ノ通法ナリト」⁸³⁾と説いている。

先の Booth の簿記書の影響を受けて、Kelly もまた、もとよりイタリア式簿記(=複式簿記)の根本それ自体を変革するものではないが、帳簿組織の改良と総合転記の工夫などによって記帳業務の合理化を目指した実践的簿記書の刊行を企図したのである。

海野はまた、「・・・要スルニ簿記ノ術タル輒近百年ノ進歩實ニ驚クベキ者ニシテ夫ノ東半球ニ於テハ則チ、英、佛、獨逸[ドイツ]及ビオーストリア、ホーランド[オランダ]等ノ諸國ニ至ルマデ皆ナ伊法ノ複式ニ據ラザルモノナク・・・」⁸⁴⁾と記して、東半球、特にイギリス、フランス、ドイツ、さらに、オーストリアやオランダ等において複式簿記の普及を見ていることを指摘する。

さらに、彼は、西半球、具体的には、北アメリカの状況についても言及する。すなわち、「・・・又西半球ニ於テハ則チ北米合衆國[アメリカ合衆國]尤モ其學ニ銳意熱心シ所在皆ナ商業學校ヲ設テ盛ニ簿記學ノ原理及ビ其應用ヲ教授シ今日ニ至テハ儼然トシテ學校中ノ一學科トナレリ然レドモ古來簿記學ノ短所ヲ求メテ之ヲ批難スルノ要點ハ則チ實際ト原理トノ間ニ一々懸隔アリテ其說容易ニ行ハレザルヲ以テナリ是故ニ米國ニ於テハ夙ニ意ヲ茲ニ用ヒ州内ノ學校必ス實地演習ノ一科ヲ設ケ勉メテ學生ヲシテ其論理ヲ實施セシムルノ便ヲ與ヘタリ・・・學生ヲシテ徒ニ空理ノ一偏ニ流レザラシム故ニ今日ハ則チ理、實相共ニ行ハレテ益スス學ノ隆盛ヲ見ルニ至レリ・・・」⁸⁵⁾と。そして、「・・・嗚呼

簿記學ノ起ル其レ此ノ如ク久シ世ノ斯學ニ從事スルモノ何ゾ一思セザシテ可ナランヤ・・・」⁸⁶⁾と結んでいる。

すなわち、海野は、それまでに取り上げたイギリスなどの場合と異なり、簿記書の著者たちの名前、あるいは、その標題に言及することはないが、西半球、特にアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記する）では簿記の教育が非常に熱心に行われており、「商業學校」（つまり、商業専門学校（commercial college）や実業専門学校（business college））を設けて盛んに簿記の原理と応用を教授していること、また、実際と原理との間に大きな隔たりがあるがゆえに複式簿記が容易に行われないう、従来から簿記教育の欠点として指摘されてきた批判に対処するため、実地演習の科目を設けてその理論を実践できるよう工夫していることを指摘する。そして、それゆえに、アメリカでは、海野の言う「・・・理、實相共ニ行ハレテ益ス・・・」との状況が醸成され、簿記が隆盛を見るに至っていると述べているのである。

8) 簿記の文献目録と結び

海野は、「・・・今バルゴー氏以來近代ニ至ルマテ其尤モ著名ナルモノヲ舉グルベキハ則チ左ノ如シ・・・」⁸⁷⁾と記して、複式簿記を世界で最初に印刷教本として解説した「簿記論」を含む、Paciolo の数学書『スマム』が出版された1494年から1880年に至るまでの期間に出版された簿記書のリストを提示する。ただし、それは、以下に掲げるように、個々の簿記書の出版年とそれぞれの著者たちの名前だけのリストであった。

千四百九十四年	リウカス、ゲー、バルゴー
千五百三十一年	ジョハン、ゴットリーブ
千五百四十三年	ヒウグ、ヤールドカスツル
千五百六十五年	バレンチン、メンハー、デー、ケンプテン
千五百六十九年	ジェームス、ピール
千五百八十八年	ジョン、メルリス
千五百九十六年	ニコラス、ペートル

千 六 百 二 年	シモン、スチーブン
千六百七十四年	ジョン、コリンズ
千六百八十四年	アレキサンドル、リセット
千六百八十四年	リチャード、ダフホルン
千七百二十六年	チャールズ、ホットン
千七百三十年	マルコルム
千七百三十年	デ、モルガン
千七百三十六年	ジョン、メイヤー
千七百四十年	ウエブストル
千七百五十年	ジェムス、トブソン
千七百五十八年	ドウン
千七百六十年	ウストン
千七百六十八年	ドウリング
千七百六十八年	ジョン、メイヤー 再版
千七百七十七年	ペーリー、エンド、スクラツトン
千七百八十三年	テイロル
千七百八十四年	ザルワース
千七百八十九年	ベンジャミン、ブース
千七百九十六年	エドワード、トーマス、ジョンス
千 八 百 一 年	ピー、ケイリー
千 八 百 七 年	ローライン
千 八 百 九 年	シー、モリソン
千八百十一年	チャールズ、ホットン 再版
千八百十八年	リツチー、エンド、コロヘルム
千八百二十年	アール、ヂー、ハミルトン
千八百二十三年	シー、モリソン 再版
千八百二十八年	チンウル
千八百五十一年	ゼイ、エー、ベン子ツト

〔論文〕 わが国における会計史研究の先駆的業績（中野）

千八百五十一年	ジェームス、ハツドン
千八百五十一年	イラ、メヒウ
千八百六十年	イラ、メヒウ 再版
千八百六十三年	ブライヤント、エンド、ストラツトン
千八百六十八年	クリツテンデン
千八百六十八年	ハミルトン、エンド、ベル
千八百六十九年	全 再版
千八百七十年	ダブリユ、スミス
千八百七十一年	エル、ビー、ハナホルド
千八百七十一年	シー、シー、マルス
千八百七十一年	チャレス、ハツスウル
千八百七十一年	ライト
千八百七十二年	イー、ジー、ホルソム
千八百七十二年	ダブリウ、イングリシ
千八百七十三年	ダブリウ、アール、ヲール
千八百七十四年	ハミルトン、エンド、ベル 三版
千八百七十五年	ジヨン、カルデコツト
千八百七十五年	ジー、エヌ、コーメル
千八百七十五年	エフ、ハイン、カーター
千八百七十七年	エチ、モンリー 六版
千八百七十九年	ゼイ、グロスベツク
千八百八十年	ダツフ

」⁸⁹⁾

上掲のリストに掲記された簿記書の著者たち、つまり、「リウカス、デー、バルゴー」ら「ダツフ」までをもつて、海野は、「以上記スル所ハバルゴー氏以來輓近ニ至ルマデ凡ソ四百餘年ノ間歐米諸國ニ輩出セル伊、英兩派ノ尤モ有名ナル者ナリ・・・」⁸⁹⁾と述べている（なお、海野が掲げた出版年とカタカナ表記の執筆者名から筆者が推定した簿記書の一覧については、別途、本稿の注

88) に示しているので参照されたい)。

このリストに関連して、海野は、「・・・彼ノ英國ノ如キハラールドカスツル氏以來既ニ百五十餘種ノ簿記書出テタリト云ヘリ今夫レ簿記學ノ起ル此ノ如ク久シト雖ドモ而カモ其實際ニ行ハレテ能ク偉大ノ功ヲ奏スルニ至リシハ實ニ千八百年代ノ初トス・・・」⁹⁰⁾と記している。すなわち、イギリスでは Oldcastle の簿記書以来、既に250種余の簿記書が刊行されているが、複式簿記が実践されてその機能を能く発揮するに至るのは、1800年代の初め、つまり、19世紀初頭のことであった旨を併せて指摘しているのである⁹¹⁾。

最後に、海野は、「・・・鴻儒ジョンソン [Samuel Johnson] 嘗テ言ヘルコトアリ曰ク簿記ヲ知ラザルモノハ共ニ商業ノ道ヲ談ズベカラズト・・・」⁹²⁾と記して、詩人・批評家かつ英語辞典の編集者でもあったイギリスの碩学 Johnson の文言を引用する。その上で、わが国の状況について、「・・・然ラハ則チ苟モ國ヲ亞細亞 [アジア] ノ東方ニ建テ、其盛衰ヲ貿易ノ一路ニ決セントスルモノ抑モ斯術ヲ措テ將タ何ニ頼ランヤ將タ何ニ頼ランヤ」⁹³⁾と述べ、国家の盛衰を貿易に依存するわが国における簿記の重要性を高調して、『簿記學起原考』の本文を閉じている⁹⁴⁾。

Ⅲ 結 語

本稿では、海野力太郎（纂譯）『簿記學起原考』（1886）を考察し、その叙述内容の詳細な検討を通じて、わが国への洋式簿記の本格的導入の黎明期に登場した彼の先駆的な会計史研究の内容を明らかにすることにあつた。

既に述べたように、『簿記學起原考』は、わが国で最初に会計（簿記）の歴史を取り上げた著作ではない。本書に先立って刊行された曾田愛三郎の「記簿法 Book-keeping」が存在するからである。ただし、曾田の論稿は、明治初期の新しい諸学科の起源について、外国の文献を基に編輯・解説した便覧の小冊子である『學課起源畧説』（1878）に収載されたわずか3頁強の小稿であり、その中で、簿記の歴史が略述されていたにすぎない。これに対して、海野の『簿

『簿記學起原考』は、単行本として、会計(簿記)の歴史を取り上げた、わが国で最初、世界的に見ても、Foster の *The Origin and Progress of Book-keeping*……(1852) に次ぐ第二番目のものと位置づけられる。

もちろん明治初期の欧化政策の下でようやく本格的に導入されるようになった洋式簿記、とりわけ複式簿記の技法そのものの習得に精一杯であった時期に刊行された『簿記學起原考』に、研究上のオリジナリティを求めることは酷であると考えられる。海野は自らの歴史叙述を展開するにあたり参考にした文献を「引用書目」に列挙している。しかし、そこに掲げられた19冊の欧米の文献のうち、簿記に関するものはわずか6冊であり、しかも、その中で簿記の歴史を専門的に取り上げた文献は皆無である。また、残る歴史、数学、および、辞書・百科辞典の類に属する13冊の文献のうち、簿記の歴史を専門的に論じたものは、わずかに Beckmann の論文集 *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen* の英語版、特にその第四版である *A History of Inventions, Discoveries and Origins* (1846) に収載された論稿、つまり、「イタリア式簿記」(“Italian Book-keeping”) のみである。

もっとも、『簿記學起原考』の「引用書目」に掲げられた欧米の文献だけでも、これらを個人的に入手(蒐集)することそれ自体が、明治期、特にその前半にあっては、きわめて困難であったであろうし、さらに、これらの文献から簿記の歴史を叙述(纂訳)することはもっと困難であったに違いない。しかし、海野は、欧米の文献を精力的に蒐集し、Beckmann の論稿を主たる底本としつつ、それだけでなく、他の著作も含めて、これらの文献からの抜粋をもって本書の主要部分を構成したのである。

『簿記學起原考』の内容は、前節で見たように、端的に言えば、欧米(主としてイギリス)で刊行された簿記書と、これらの著者たちの名前の羅列的列挙にとどまっている。海野がわずかでも簿記書の教示内容に踏み込んでいるのは、Stevin の「簿記論」、および、Booth と Jones (Edward T. Jones) の簿記書など、数えるほどしかない。しかも、個々の簿記書の間での相互関係(系譜)についての検討もなく、また、これらの簿記書とそれらが刊行された時代の社

会経済的環境とを照応させようとする試みも見出されない。もちろん今日の会計史研究の成果に照らして誤った叙述と判断される箇所も見出される。その意味で、本書は、文献史的研究の範疇、しかも、その初歩的段階にとどまるものと言えよう⁹⁵⁾。

しかしながら、本書に見出されるこのような限界ないし欠点は、今日と異なり、一次史料の蒐集と分析が容易でなかった当時のわが国における会計史研究の状況を考えれば、やむを得ないものと考えられる。むしろ、本書に対する評価は、学界人ではない実業人でありながら、明治期前半の困難な時代的環境下にあつて、会計の歴史、特に複式簿記の起源とその発展に並々ならない関心を抱き、海外の先行研究に依拠するものではあつたが、本書の執筆と刊行に果敢に取り組んだ海野の熱意と努力に向けられるべきであろう⁹⁶⁾。このような観点から見れば、海野の『簿記學起原考』は、当時としてきわめて画期的な著作であり、驚くべきものであると言えよう。本書は、わが国における会計史研究、と言うよりは近代会計制度構築の黎明期に出現した先駆的業績として高く評価され、かつ、尊重されるべきものと考えられる⁹⁷⁾。

[注]

* 本稿は、拙稿(中野 [2016])にその一部(V.1～V.3)として収録した論稿について、その後の考察結果に基づき加筆・修正を行ったものである。

- 1) わが国の学界で海野の『簿記學起原考』に最初の着目したのは、Luca Pacioliの「簿記論」(1494)——これは、後述するように、複式簿記を印刷文献の形で世界最初に解説したもの——の邦訳をわが国で最初に試みた人物である平井泰太郎であつたと言われる(西川(孝) [1975], 2頁; 同 [1982], 203頁; see 平井 [1920], 83頁)。

『簿記學起原考』に関する先行研究としては、江村 [1953], 序説; 小島 [1965], 第9章; 同 [1973], 第5章; 西川(孝) [1975]; 同 [1978]; 同 [1982], 第二部簿記學起原考 解題 があるので参照されたい。

また、本書については、西川孝治郎により、“ORIGIN OF BOOK-KEEPING”という標題で英訳が試みられている。この英訳版については、西川(孝) [1982]の巻末に収載されているので併せて参照されたい(「復元・簿記學起原考」)。

- 2) 1873年は、この年の12月にわが国で最初の複式簿記解説書である Shand（講述）『銀行簿記精法』（全5分冊）が出版されるとともに、後述のように、同年6月にわが国最初の洋式簿記の解説書となる福澤諭吉（訳）『帳合之法』（「初編」、2分冊）が、また、10月に加藤斌（訳）『商家必要』（「初編」、2分冊）が、それぞれ刊行されている。これらのことから、「1873年」をもってわが国における近代会計制度展開の起点と捉える考え方があり、例えば、日本会計研究学会は、このときから百年が経過した1973年に、この間に公表された会計文献の総目録を作成するなど、百周年記念事業を実施している（黒澤 [1982], 1-2頁; see 日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会（編）[1973]）。

もっとも、福澤が、後に『福澤全集緒言』に収載された「民間経済録」の冒頭に、「明治六年の頃帳合之法を發行して、書物は買れたれども、扱この帳合之法を商家の實地に用ひて店の帳面を改革したる者は甚だ少し。・・・」と記しているように、複式簿記の実務への浸透・普及は容易でなかった（福澤 [1958], 61頁; see 田中 [2005], 134-135頁）。

- 3) Shand の『銀行簿記精法』（1873）の詳細については、西川（孝）[1971], 第五話; 同 [1982], 第一部 銀行簿記精法 解題; 黒澤 [1990], 第一編第一章 を参照されたい（See also 津村 [2009]; 同 [2014]; 白坂 [2013], 第2章）。
- 4) 福澤の『帳合之法』（1873/1874）の詳細については、西川（孝）[1971], 第七話; 同 [1982], 第一部 帳合之法 解題; 黒澤 [1990], 第一編第三章 を参照されたい（See also 片岡（泰）[2007], 第13章; 津村 [2007]; 同 [2016]）。

なお、本文中でも記したように、福澤の『帳合之法』は、1873年に単式簿記を解説した「初編」（2分冊）が、翌1874年に複式簿記を解説した「二編」（2分冊）がそれぞれ刊行されている。したがって、複式簿記を解説した著作としては『銀行簿記精法』に遅れるが、単式簿記を含めた洋式簿記の解説書としてはわが国で最初のものになる。

- 5) 加藤の『商家必要』（1873/1877）の詳細については、西川（孝）[1982], 第一部 商家必要 解題 を参照されたい。
- 6) 小林の『馬耳蘇氏記簿法』（1875）と『馬耳蘇氏複式記簿法』（1876）の詳細については、西川（孝）[1971], 第八話; 同 [1982], 第一部 馬耳蘇氏記簿法 解題 を参照されたい（See also 片岡（泰）[2007], 第15章; 津村 [2010]）。

なお、洋式簿記が本格的に導入されるようになった明治初期にあつては、その当時に出版された簿記解説書の標題、たとえば、『銀行簿記精法』や『帳合之法』、あるいは、『馬耳蘇氏記簿法』、『馬耳蘇氏複式記簿法』などに見られるように、英語の“bookkeeping”に相当する語として、「簿記」、「帳合」、「記簿」といったさまざまな邦語が工夫・創案されている。そして、それらは、次第に、今日、われわれが用いている「簿記」に収斂されることになる。

- 7) わが国固有の簿記法、特に江戸時代の商家等で実践されていた「和式帳合法」

の詳細については、小倉 [1979] を参照されたい (See also 大森 [1921], 第四; 平井 [1936]; 山下 [1936]; 小倉 [1962]; 同 [1990]; 北島 (編著) [1962]; 河原 [1977]; 西川 (登) [1993]; 末永 [2000]; 田中 [2005], 第2節; 同 [2014], 第1章・第2章; 津村 [2014])。

また、江戸幕末から明治初期、特に1873年に至るまでの時期の洋式簿記導入の試みについては、例えば、西川 (孝) [1971], 第三話～第四話を参照されたい。

- 8) 曾田は、本稿で考察する海野の『簿記學起原考』(1886) に先行する1878年に、「記簿法 Book-keeping」と題された論稿を著している。これが、わが国において、会計 (簿記) の歴史を取り上げた最初の著作と位置づけられる。ただし、当該論稿は、本文でも述べたように、単行本ではなく、自由党系のジャーナリストとして活動した曾田が、教師時代に編輯した、明治初期当時の新しい諸学科の起源を取り上げた便覧の小冊子である『學科起源畧説』(1878) 中に収載されたものである。そして、そこでは、複式簿記 (= イタリア式簿記) の歴史が、「化學」(Chemistry), 「理學」(Natural Philosophy), 「歴史」(History), 「地理學」(Geography), 「四則算」(Arithmetic), 「代數學」(Algebra), 「幾何學」(Geometry) のそれとともに、海外の文献に依拠しながら3頁強で概説されている (曾田 [1878], 11丁右～12丁左)。

曾田の当該論稿に論及している先行研究として、小島 [1973], 193-194頁; 西川 (孝) [1975], 6頁; 同 [1982], 200-201頁がある (西川 (孝) [1959] の巻末に、『學科起源畧説』中の「記簿法 Book-keeping」の複製版が掲載されている)。

なお、『學科起源畧説』以外の曾田の著作として、国立国会図書館サーチによれば、『欧羅巴革命史』(上・中巻: 訳書) (1884), 『大英今代史』(全2巻: 訳書) (1885), 『未来の商人一名・功名の魁』(1887) などが挙げられる。

- 9) 曾田の「記簿法 Book-keeping」は、当時の状況に照らして、彼自身のオリジナリティに基づくものではなく、外国の文献に依拠したものである。曾田自身は、依拠した文献について明らかにしていないが、叙述内容がきわめて近似していることから、曾田の論稿は、ドイツの官房学者であった Johann Beckmann が分冊形式で刊行した科学史・技術史に関する論文集 *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen* (1780～1805) に収載された、複式簿記 (イタリア式簿記) の歴史を論じた論稿 (“Vom Italiaenischen Buchhalten”), より具体的には、ドイツ語の原書を基にイギリスで独自に編集・出版された英語版、特にその第四版にあたる *A History of Inventions, Discoveries and Origins* (1846) に収載された論稿 (“Italian Book-keeping”) を底本、と言うよりは Beckmann の論稿の邦訳 (正確には前半部分の邦訳) であると考えられる (中野 [2015], 9-10頁)。

なお、曾田の「記簿法 Book-keeping」、および、その底本となった Beckmann の “Italian Book-keeping”, それぞれの叙述内容の詳細については、中野 [2015] を参照されたい (Beckmann の著作については、後掲する注17)

- も併せて参照のこと)。
- 10) Foster は、*A Concise Treatise on Commercial Book-keeping*, …… (Boston, 1836) や、*Double Entry Elucidated*: …… (London, 1843) に示されるように、大西洋の両岸で、複式簿記の解説書などを含めて、多くの著作を刊行している。このうち、*The Origin and Progress of Book-keeping*: …… について、Foster は、その当時に所有していた150点以上の会計関係の文献に基づいて著したとするが、同書は、「序文」(Preface) と「文献目録」(“Works on Book-keeping”, “American Works on Book-keeping”, および, “Mercantile Tables”)などを除けば、本文はわずか22頁、全体でも自著の紹介 (“New and Popular Works, By B.F. Foster”)を含めて54頁にすぎない。しかしながら、ともかくも、会計(簿記)の歴史を初めて専門的に取り上げた単行本が出現したという点で、会計史研究の歴史上、画期的著作と位置づけられる (Foster [1852], p.iii; see 久野(秀) [1979], 273-279頁; Yamey [1980], p.90)。
 - 11) 西川(孝) [1971], 328頁; 同 [1975], 2-5頁; 同 [1982], 196-199頁。

海野は、実業人ではあったが、『簿記學起原考』以外にも、国立国会図書館サーチによれば、簿記に関する著作として、『野線學』(1888), 『元帳メ切之図』(1888), 『簿記學の起源及び沿革』(1898), 『實用簿記法』(1899)などを出版している。また、簿記以外の著作として、『心酔記』(編)(1893)や『鉄道関係書類7(植木家資料)』(編)(1913)なども刊行している (See 西川(孝) [1971], 328-329頁; 同 [1975], 4頁; 同 [1982], 197-199頁)。
 - 12) 海野 [1886], 「序文」。

なお、『簿記學起原考』の刊行と同じ時期に発行された『東京經濟雜誌』(經濟雜誌社, 1886年9月号)においても、「・・・簿記學起原考は海野力太郎氏の纂譯に成り簿記學の起原及び其沿革を叙述せられたる良書なり弊社の田口卯吉が其卷首に左の數言を序しければ茲に掲て看官の閲覽に供す」と記されて、本文中に掲げた「序文」と同一内容の文言が掲記されている (田口(卯) [1886])。
 - 13) 本書に「序文」を寄稿した田口卯吉 (1855~1905) の活動分野は多岐の範囲に及んでおり、經濟学者かつ經濟評論家であり、啓蒙家、歴史家、政治家、実業家などでもあった。田口の生涯とその活動内容の詳細については、田口(親) [2000] を参照されたい。
 - 14) 海野 [1886], 「例言」。
 - 15) 海野は、「引用書目」に見られるように、引用文献等については著者の姓と著作の標題のみを示すだけであり、同一の著作について、異なる版や出版年・出版地のものがある場合にも、いずれを用いたのか、その詳細を示していない。また、本文における歴史叙述を進める過程においても具体的な引用文献等を該当箇所にて明記していない。この点について、小島男佐夫は、『簿記學起原考』が刊行された当時の状況を斟酌して、「・・・当時一般的には、多くの訳書が著者名

のみを記して原書名を示さず、或いは他の訳本を底本とした場合にもそれを示さない等の比較的ルーズな出版事情であった。そうした事情を反映してか、海野氏も欧文の原書を抜粋してその大意を訳述し、この書を成すといいつながら、その所論については、一々その出典を注記することをせず、・・・と記している(小島 [1965], 245頁)。

16) 海野 [1886], 「引用書目」。

西川(孝) [1975]; 同 [1978]; 同 [1982] には、『簿記學起原考』の「引用書目」中に掲載された欧米文献の著者と標題についての調査結果が記されており、その大部分は国立国会図書館に所蔵されていると言われる(西川(孝) [1975], 9-11頁; 同 [1978], 82-84頁; 同 [1982], 193-19頁)。

なお、以下のリストは、「引用書目」中にカタカナで表記されている欧米文献について、筆者が、『簿記學起原考』の刊行年に近い時期に出版されたものを、各種の文献目録やデータベース等から推定した結果を示したものである(ただし、海野は、同一標題の著作について、異なる版や出版年がある場合に、そのいずれを用いたのか、詳細を記していないので、あくまでも参考例として掲げている)。

(a) 簿記

・「メヒウ氏：プラクチカル、ブックキーピング」

Ira Mayhew, *Mayhew's Practical Book-keeping embracing Single and Double Entry*,・・・, 140th ed., Philadelphia, 1880.

※初版は1851年に *A Practical System of Book-keeping by Single and Double Entry*,・・・ (New York) という標題で刊行

・「カーター氏：プラクチカル、ブックキーピング」

Frederic H. Carter, *Practical Book-keeping adapted to Commercial and Judicial Accounting*,・・・, 2nd ed., Edinburgh, 1874.

※初版の刊行年は確認できず(1885年に第五版の刊行あり)

・「ホルソム氏：ロジカル、ブックキーピング」

Ezekiel G. Folsom, *The Logic of Accounts; A New Exposition of the Theory and Practice of Double-Entry Bookkeeping, based in Value*,・・・, New York, 1873.

・「ハナホルド氏：ブックキーピング、バイ、シングル、エンタリー」

Lyman B. Hanaford and Jesse W. Payson, *Book-keeping by Single Entry; for Common Schools*,・・・, New York, 1858.

※「1871年」版の刊行あり

・「ジヤクソン氏：プラクチカル、システム、ラフ、ブックキーピング、バイ、ダブル、エンタリー」

〔論文〕 わが国における会計史研究の先駆的業績（中野）

George Jackson, *Jackson's Complete System of Practical Book-keeping*, . . . ,
New ed., London, 1843.

※「1860年」版の刊行あり

- ・「イルスオース氏：シングル、エンド、ダブル、エントリー、ブックキーピング、エンド、ビジ子ス、マニュアル

Henry W. Ellsworth, *Ellsworth's Single and Double Entry Book-keeping and Business Manual*, . . . , New York, 1868.

※ 1875年に第六版の刊行あり

(b) 歴史

- ・「ベックマン氏：エ、ヒストリー、ヲフ、インベンションス、ジスコバリース、エンド、ラルジンス」

John Beckmann (Johann Beckmann), *A History of Inventions, Discoveries and Origins* (translated by W. Johnson; revised and enlarged by W. Francis and J.W. Griffith), 4th ed., London, 1846.

※英語版の初版は1797年に *A History of Inventions and Discoveries* (London) という標題で刊行

- ・「フリデート氏：アンセント、ヒストリー」

Peter Fredet, *Ancient History; from the Dispersion of the Sons of Noe, to the Battle of Actium and Change the Roman Republic into an Empire*, . . . , Baltimore, 1849.

※1879年に第三十三版の刊行あり

(c) 数学

- ・「ダビス氏：マゼマチカル、ジクシヨナリー」

Charles Davies and William G. Peck, *Mathematical Dictionary and Cyclopaedia of Mathematical Science*, . . . , New York, 1855.

※「1872年」版の刊行あり

- ・「ルーミス氏：ツリーチー、ヲフ、アルゼブラ」

Elias Loomis, *A Treatise on Algebra*, New York, 1846.

※ 1873年に改訂版の刊行あり

- ・「トドハンター氏：イレメンツ、ヲフ、ユウクリット」

Isaac Todhunter, *The Elements of Euclid for the Use of Schools and Colleges*, . . . , New ed., London, 1867.

※ 初版の刊行年は確認できず（「1886年」版の刊行あり）

(d) 辞書・百科事典

- ・「リイ氏：ユニバーサル、ジクシヨナリー、ヲフ、アーツ、サイヤンセス、エンド、リテラチュアー」

Abraham Rees, *The Cyclopaedia; or, Universal Dictionary of Arts*,

Science, and Literature, London, 1819-1820.

- ・「ナイト氏：インサイクロピヂヤ、ヲフ、ブリタニカ」
Charles Knight, *The English Encyclopaedia*, London, 1868.
- ・「ブランデ氏：エ、ジクシヨナリー、ヲフ、サイヤンス、リテラチユアー、エント、アート」
William T. Brande and Joseph Cauvin (eds.), *A Dictionary of Science, Literature & Art*……, 2nd ed., London, 1852.
※ 1875年に新版の刊行あり
- ・「ビートン氏：エ、ジクシヨナリー、ヲフ、ユニバーサル、インホルメーション」
Samuel O. Beeton and John Sherer, *Beeton's Dictionary of Universal Information*……, London, 1858-1862.
※ 1877-78年に改訂版の刊行あり
- ・「チャンパー氏：エ、ジクシヨナリー、ヲフ、ユニバーサル、ノーレッツヂ、ホール、ゼ、ピープル」
William Chambers and Robert Chambers (eds.), *Chambers's Encyclopaedia: A Dictionary of Universal Knowledge for the People*……, London, 1868.
- ・「コーランヂ氏：ポピユラル、エンサイクロピヂヤ」
Leo de Colange, *Zell's Popular Encyclopaedia, A Universal Dictionary of English Language, Science, Literature, and Art*, Philadelphia, 1870-1871.
- ・「リプレー及ダナ氏：アメリカン、サイクロピヂヤ」
George Ripley and Charles A. Dana (eds.), *The American Cyclopaedia; A Popular Dictionary of General Knowledge*, New York, 1883-1884.
※ 初版は1858-63年に *The New American Cyclopaedia; A Popular Dictionary of General Knowledge* (New York) という標題で刊行
- ・「キツドル及スチーム氏：ゼ、サイクロピヂヤ、ヲフ、エジュケーション」
Henry Kiddle and Alexander J. Schem (eds.), *The Cyclopaedia of Education; A Dictionary of Information for the Use of Teachers, School Officers, Parents, and Others*, New York, 1877.

- 17) Beckmann (1739~1811) は、ゲッティンゲン大学で45年間にわたり経済学の教授を務めている。本文中で言及した *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen* (1780~1805) は、Beckmann が刊行した、ヨーロッパにおける科学史・技術史の草分けの労作と言うべき論文集である。これは、官房学者であった彼が、「発明」(*Erfindungen*) という語を通常の意味よりも広義に解して、文献学的見

地に加え、当時の科学からできる最大限の実証的見解をもって、金融業から簿記・為替手形・年金・保険・富くじのような商業技術、あるいは、捨て子院や孤児院・病院・廃兵院などの社会的施設、さらに、チューリップやパイナップル、鯉などに至る、きわめて広汎な項目を取り上げ、それぞれの歴史について、分冊形式(5巻(各巻4分冊,計20分冊))により、25年という長い年月をかけて叙述・刊行したものである。しかも、この Beckmann の論文集については、英語版——ただし、それは、原書であるドイツ語版からの純然たる英訳書でなく、原書に含まれた項目が削除または統合される、あるいは、原書に含まれていない「蒸気機関」が新たな項目として追加されるなど、独自の編集が加えられたもの——が刊行されている。英語版は、1797年に初版が *A History of Inventions and Discoveries* という標題で出版され、続けて第二版(1814)と第三版(1817)が刊行された後の1846年に、標題を *A History of Inventions, Discoveries and Origins* に改められた第四版が刊行されている。そして、ドイツ語版と英語版(初版～第四版)のいずれにおいても、解説項目がアルファベット順に配列されない中で、なぜか「イタリア式簿記」(“Vom Italiaenischen Buchhalten” or “Italian Book-keeping”)が一番最初の項目に取り上げられているのである(Beckmann [1783], S.1-15; 同 [1797a], pp.1-9; 同 [1814a], pp.1-9; 同 [1817a], pp.1-9; 同 [1846a], pp.1-5 (特許庁内技術史研究会(訳) [1999a], 41-48頁); see 特許庁内技術史研究会(訳) [2000b], 430-432頁)。

上掲の Beckmann の簿記史に関する論稿(“Vom Italiaenischen Buchhalten” or “Italian Book-keeping”)の叙述内容の詳細については、中野 [2015], 2 を参照されたい。

なお、「引用書目」中に、「ベックマン氏」の著作として、「エ、ヒストリー、ヲフ、インベンションス、ジスコバリース、エンド、ラルジンス」と記されていることから明らかなように、海野が『簿記學起原考』を構成(纂訳)するにあたり、主たる底本として用いたのも、Beckmann の著作、特に英語版(第四版)に収載された簿記史に関する論稿(“Italian Book-keeping”)であった。これはまた、先の注9)で言及したように、『簿記學起原考』に先行する曾田の『学課起原畧説』(1878)に収載された論稿(「記簿法 Book-keeping」)の底本にもなっている。Beckmann の論稿を介しての海野の著作と曾田の著作との相互関連については定かでないが、この点について、西川孝治郎は、「海野は『学課起原畧説』を知らず、自ら英書ベックマン氏事物起源史」を見出してその大半を引用した・・・」と指摘している(西川(孝) [1982], 200頁; see 小島 [1965], 195-196頁)。

18) Carter [1874], pp.3-5.

19) 海野 [1886], 「題辞」。

なお、「題辞」の下には、積み重ねられた3冊の書籍を背にして置かれた、左

右に頁が開かれた1冊の書籍と、さらにその前に月桂樹の輪が置かれた挿画が描かれている。

- 20) 小島 [1965], 246頁; 同 [1973], 198頁。
海野が記した「題辞」は、遡れば、Euclides (Euclid) の文言“A solid is that which has length, breadth, and thickness.”に由来するものと推測されている(西川(孝) [1971], 326頁; 同 [1975], 9頁; 同 [1982], 195頁; 小島 [1973], 198頁; see Todhunter [1886], p.220)。
- 21) 海野 [1886], 1頁。
本稿で考察している海野の著書の標題は、表紙に『簿記學起原考』と記されているように、「起原」が用いられている。ただし、本文、例えば、「刊行の言葉」の冒頭には「簿記學起源考」と記されて「起源」が用いられており、「起原」と「起源」は特に意識されることなく相互代替的に使用されている。
- 22) 海野 [1886], 2頁。
- 23) 海野 [1886], 3頁。
複式簿記の起源について、かつては古代ローマ説や古代インド説なども提唱されたことがあるが、現在では中世イタリア起源説が支配的である。ただし、この説は、さらに、①フィレンツェを中心とするトスカーナ説、②ジェノヴァ説、③ミラノを中心とするロンバルディーア説、④ヴェネツィア説、さらに、⑤イタリアの諸商業都市(都市国家)においてはほぼ同時期に生成したと考える同時期説に分けることができる。なお、これらの諸説のうち、Beckmann の論稿などで言及されるヴェネツィア説については、複式簿記の利用を根拠づける史料(会計帳簿など)が、フィレンツェやジェノヴァ、ミラノのそれと比べて相対的に後の時期のものしか現存していない(または、発見されていない)という欠点がある。このように、複式簿記の起源については、史料的な制約や、複式簿記の本質要件をめぐる論者間での見解の相違もあって、中世イタリア起源説を採っても、共通した認識を形成するまでに至っていない。しかしながら、複式簿記が、おおむね13世紀初頭から14世紀末までの間に、イタリアで商業と銀行業の簿記実務のうちから生成・発展し、15世紀に体系的組織を確立したという点では、多くの論者間に一応の合意が認められる。このような複式簿記の起源をめぐる諸説の詳細については、小島 [1987], 第2章; 片岡(泰) [1988], 第1章; 同 [2005], 第1節; 同 [2007], 第1章第3節; 同 [2012a], 第1節を参照されたい(See also 泉谷 [1980], 第1章第3節; 橋本(寿) [2009], 第2章2)。
- 24) Adam Anderson (1692~1765) は、スコットランド生まれの商業史家であり、彼の代表的著作には、編年体形式によるイギリスの商業史 *An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, From the Earliest Accounts to the present Time. Containing, An History of the great Commercial Interests of the British Empire.*… (2 vols, 1764) がある。

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績 (中野)

なお, Anderson の略歴については, Matthew and Harrison (eds.) [2004b], p.15 を参照されたい。

- 25) 海野 [1886], 3-4 頁; see Beckmann [1846a], p.1 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41頁); see also Carter [1874], p.3; cf. Anderson [1764a], p.408; 同 [1787b], p.130.

ここで言う「リウカス、ジー、バルゴー」とは、もちろん Luca Pacioli (c.1445 ~c.1517) のことをさす。彼は、イタリアのトスカーナ地方にあるサンセポルクロ (Sansepolcro) で生まれ、フランシスコ派の修道士、後に数学者となり、フィレンツェやミラノ、ナポリなど、イタリア各地の大学で数学を講じている。彼の主著としては、複式簿記を解説した世界最初の印刷文献とされる「簿記論」(Particularis de Computis et Scripturis) を収載した数学書 *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* (1494) (わが国ではしばしば標題の冒頭の語を用いて『スムマ』と略記される) に加えて、*De Divina Proportione* (1509) が挙げられる。なお、『スムマ』に収載された「簿記論」の現代語訳については、Jäger [1876]; Gitti [1878]; Kheil [1894]; Geijsbeek [1914]; Crivelli [1924]; Penndorf [1933]; Haulotte et Stevelinck [1962]; Brown and Johnston [1963]; Cripps [1995] などを、また、特にその邦語訳については、平井 [1920]; 片岡 (義) [1967], 第二部; 岸 [1983], 第4章; 片岡 (泰) [1988], 第7章 などを、さらに、「簿記論」で教示されていた複式簿記 (具体的には、15世紀当時のヴェネツィアで用いられていた商業簿記 (=ヴェネツィア式簿記) の特質等の考察については、岸 [1983], 第2章~第4章; 片岡 (泰) [1988], 第6章・第7章; 同 [2005], 第3節 などを、それぞれ参照されたい。

なお, Paciolo の「簿記論」以前にも、例えば、Benedetto Cotrugli による商業解説書 *Della mercatura et del mercante perfetto* の中に複式簿記の解説が見出される。しかし、それは、1458年に原稿が完成されていたにもかかわらず、出版されたのは1573年に至ってのことである。この Cotrugli の「簿記論」(原稿の写本と出版本) の詳細については、片岡 (泰) [2005], 第2節; 同 [2007], 第2章 を参照されたい。

- 26) 上記の『スムマ』の著者の名前の表記について、かつては“Luca Pacciolo”, あるいは, “Lucas Paccioli”, “Luca Paciolo”, “Lucas Pacioli” など、さまざまな綴りのものが見受けられた。しかし、今日の通説によれば、姓だけで表記するときは単数形の“Paciolo”を用い、他方、姓と名を併記するときは「パチョーリ家のルカ」、つまり、家族を表すという意味で複数形の“Pacioli”を用い, “Luca Pacioli”と表記するのが正しいとされる (小島 [1973], 序3頁; 泉谷 [1980], 1頁注(1); 岸 [1983], (序) ii-iii 頁; 片岡 (泰) [1988], 101頁; 同 [2007], 85頁; see Taylor [1944])。

なお, Paciolo に関する伝記的叙述については, Taylor [1942] を参照された

- い (See also Taylor [1956] ; cf. Boyer [1989], pp.278-279)。
- 27) 海野 [1886], 4頁; see Beckmann [1846a], p.1 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41頁)。
- 28) 海野 [1886], 4-5頁。
- 29) 海野 [1886], 5-9頁; see Fredet [1879], Part VII (Commerce)。
- 30) 海野 [1886], 9頁。
- 31) 海野 [1886], 9頁; see Anderson [1764a], p.408; 同 [1787b], p.130; see also Beckmann [1846a], p.1 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41頁)。
- 32) 海野 [1886], 9-10頁。
- 33) 海野 [1886], 10頁; see 西川 (孝) [1982], p.15注43。
- 34) Cronhelm の簿記書の詳細については, 中野 [1992], 第5章IIを参照されたい (See also 久野 (秀) [1979], 47-48, 255-259頁; 中野 [2012b], 270-271頁)。
- なお, Cronhelm の簿記書には, 「序文」(Preface)の次に, “Sketch of the Progress of Book-keeping.”と題された稿が特に設けられ, わずか5頁ではあるが, 簿記の歴史が取り上げられている。これと同様な簿記の歴史に関する概説は, Cronhelm の簿記書に先行する Patrick Kelly の簿記書 *The Elements of Book-keeping*... (1801) にも見出すことができる。同書の「序文」(Preface)の後も, “A Short History of Book-keeping.”という小稿が設けられており, そこでは, 簿記の歴史が簡潔に論じられている。すなわち, これら二つの簿記書は, いずれも注10) で言及した Foster の会計史書 *The Origin and Progress of Book-keeping*... (1852) よりも半世紀近く前の出版であり, 19世紀初頭のイギリスでは, 会計, 特に簿記の歴史に対する関心がそれなりに生じていたことを窺わせる (See Cronhelm [1818], pp.x-xiv; Kelly [1801], pp.pp.iv-ix; see also Yamey [1980], pp.87-90)。
- 35) Jones (Thomas Jones) の簿記書の詳細については, 中野 [1992], 第6章IIIを参照されたい (See also 久野 (光) [1985], 第7章 § 3; 中野 [2012b], 273-275頁)。
- なお, Cronhelm の簿記書に見出される資本主義的理論的思考は, イギリス本国で展開されるよりはアメリカに移植・発展される。その初期の例は, アメリカで Jones の簿記書に先行して出版された Foster の簿記書 *A Concise Treatise on Commercial Book-keeping*... (1836) に見出すことができる。そして, このような資本主義的理論的思考が, Jones の簿記書や Folsom の簿記書などを通じてアメリカで発展的に継承されるのである (See 中野 [2012b] ; see also 中野 [1992], 第6章~第9章)。
- Foster の簿記書の詳細については, 中野 [1992], 第6章IIを参照されたい (See also 久野 (秀) [1979], 267-273頁; 久野 (光) [1985], 第7章 § 2)。
- 36) Folsom の簿記書の詳細については, 中野 [1992], 第7章IIIを参照されたい

(See also 久野 (秀) [1979], 369-374頁; 久野 (光) [1985], 第9章 § 2; 中野 [2012b], 276-278頁)。

- 37) アメリカ的な企業主体論における資本主 (主体) 理論とドイツ的な勘定理論における物的二勘定系統説 (他方で、企業主体理論と貸借対照表学説) を同一線上のものと解することには検討の余地が残されているかもしれないが、ここでは、ドイツ語圏の文献だけでなく、広く英語圏の文献をも渉猟して、勘定学説の系統的分類を試みた Karl Käfer の所説にしたがって同一線上のものと捉えておくことにする (Käfer [1966], pp.18-30 (安平 (訳) [1972], 35-61頁); vgl. Käfer [1974], S.52-57)。
- 38) 小島 [1965], 249-250頁; 同 [1973], 199-200頁; 西川 (孝) [1971], 326頁; 同 [1975], 13頁; 同 [1982], pp.16-17; see 小島 [1973], 193頁。

海野が、簿記理論に関する議論を展開するにあたり、いずれの所説に依拠したかについては他所と同様に明示されていないが、おそらく彼の所説の多くは、『簿記學起原考』の「引用書目」に掲げている「ホルソム氏 ロジカル・ブック キーピング」、つまり、アメリカの Folsom の *The Logic of Accounts*:… (1873)、特にそこで展開されている「価値受渡説」(または「価値得失説」)(つまり、資本主理論——物的二勘定系統説) から大きな影響を受けているように思われる (See 中野 [2017], 41-42頁)。

別稿の「簿記法の起源」(『實用簿記法』に収載)においても、彼は、「……就中ホルソムの如きは百家の中別に一機軸を出し大に先人未發の學理を唱道し頗る斯學の進歩を助けたり吾人は仰で其の功德を頌すべき義務あり」と記して、Folsom の所説を高く評価しているのである (中野 [2017], 40-42頁; see 海野 [1899], 3-4 頁)。

なお、堤 永類 (編)『簿記學教程』(1886)にも、海野と同様な等式関係を用いた簿記の理論的説明が見出されると言われる (西川 (孝) [1971], 327-328頁)。

- 39) 海野 [1886], 11-12頁; see Beckmann [1846a], p.2 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 42頁)。

海野が、Paciolo の『スママ』の刊行年を、「1494」年ではなく、「1495年」と誤って記したのは、もちろん彼が本書執筆の底本とした Beckmann の論稿における誤記をそのまま受け継いだことに他ならない。このことは、当時のわが国における会計史研究の状況を考慮すればやむを得ないものと考えられる (See Beckmann [1846a], p.1 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41頁); see also Beckmann [1783], S.2; 同 [1797], p.2; 同 [1814a], p.2; 同 [1817a], p.2)

ただし、海野による誤記の原因となった Beckmann のそれもまた、彼が引用した Matthieu de la Porte の簿記書に見出される誤記に起因している。De la Porte は、18世紀前半のフランスを代表する簿記書 *La science des negocians* …… (1704) の著者であり、同書には複式簿記の歴史に関する叙述が含まれて

いる。岸 [1975] に拠れば、De la Porte は、1704年版で、複式簿記がイタリア人により発明されたものであることに言及しているが、印刷術の創始との関連で複式簿記書の出版を1530年頃と考え、Paciolo については知ることなく、また、後世、簿記史上に名を残した彼の「簿記論」にも言及していない。ところが、De la Porte の死後、Pierre B. Boucher により増改訂された1798年版において、序文の冒頭に、「1495年頃、イタリア人たるルカ兄弟 Frère Luc [Paciolo] が、複式簿記論を印刷させた。この論著が種々の国語に訳された後、ヨーロッパの諸々の商業都市において、他の著書が出た。これらの著書が印刷されてからというもの、この学は大きく進歩した。・・・」と記され、Paciolo のことが言及されるに至る。1798年版に見出される内容は既にそれ以前の版にも存在すると推測されるが、少なくとも1704年版より後であることは明らかである (岸 [1975], 318-320頁; see Kelly [1801], p.vi (*); cf. Yamey [1980], p.86 note (14))。

なお、De la Porte の簿記書の詳細については、岸 [1975], 第17章; 土方 [2008], 第4章 を参照されたい (See also Bywater and Yamey [1982], pp.142-145)。

- 40) 海野 [1886], 12-13頁; see Beckmann [1846], pp.1-2 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 41-42頁)。
- 41) Paciolo の「簿記論」以後にイタリアで刊行された複式簿記の解説書、例えば、Manzoni の *Quaderno doppio* …… (1540), Casanova の *Specchio lucidissimo* …… (1558), Moschetti の *Dell' universal trattato* …… (1610) の詳細については、片岡 (泰) [1988], 第8章～第10章 を参照されたい (See also Bywater and Yamey [1982], pp.41-44,93-95; 小島 [1987], 第5章)。
- 42) 海野 [1886], 13頁; see Beckmann [1846a], p.3 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 43-44頁)。
- 43) Gottlieb が1531年に刊行した簿記書 *Ein teutsch verstandig Buchhalten* …… に先行して、既にドイツでは1518年に Heinrich Schreiber (Henricus Grammateus) の簿記書 *Ayn new kunstlich Buech* …… が出版されている。また、1546年には Gottlieb の第二の簿記書 *Buchhalten, zwey künstliche unnd verstandige Buchhalten* …… が刊行されている。これらの簿記書がドイツにおける最初期の簿記解説書と位置づけられるが、しかし、そこで解説されていたのはいずれもドイツ式簿記ないしそこからイタリア式簿記への移行段階を示すものであった。その意味から、1549年に刊行された Wolfgang Schweicker の *Zwifach Buchhalten*, …… がドイツにおける最初の複式簿記の解説書と位置づけられるのである (小島 [1987], 98-104,107-110頁)。

なお、Gottlieb により著された二つの簿記書、特にそこで解説されているドイツ固有の簿記(「ドイツ式簿記」)の詳細については、片岡 (泰) [1994], 第5章第3節; 土方 [2005a]; 同 [2005b], 第2章・第3章 を参照されたい (See

also Bywater and Yamey [1982], pp.37-40; 小島 [1987], 第7章第2節。

- 44) 海野 [1886], 13-14頁; see Carter [1874], p.3.

ただし、海野は、「・・・又一説ニ英國最古ノ簿記書ハ龍動ノ印刷家ジヨン、ゴース氏初メテ之ヲ上梓セリト然ラハ即チ二氏ノ書共ニ其年ヲ同フシテ出デタルニ似タリ・・・」とも記している。「又一説ニ」との断り書きがあるが、海野は、イギリス最古の簿記書として、Oldcastleの簿記書とは別に、同じ1543年に「ジヨン、ゴース氏」による簿記書が上梓されたと述べているのである。もっとも、この「ジヨン、ゴース氏」とは、おそらくOldcastleの簿記書の印刷者であるJohn Goughと推測されるので、1543年に二つの簿記書が出版されたというのは正しくなく、彼がOldcastleの簿記書を別個のものとして解したことによる誤謬であると考えられる（海野 [1886], 14頁; see 小島 [1965], 253頁; 同 [1973], 201頁; see also Thomson (comp.) [1963], p.202; ICAEW [1975], p.234）。

- 45) 海野 [1886], 17頁; see Beckmann [1846a], p.2 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 42頁)。
46) 海野 [1886], 17頁; see Beckmann [1846a], p.2 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 42頁); cf. Anderson [1787b], p.130.

ここで言及されているPeeleの*The Pathe waye to perfectnes*,・・・は、実際には、Peeleにとって第二の複式簿記解説書にあたる。すなわち、彼は、当該簿記書に先行して、1553年に*The maner and fourme*・・・という別の標題の簿記書を出版している。そして、この*The maner and fourme*・・・こそが、翻訳や翻案でない、イギリス人自身のオリジナリティに基づいて著された最初の複式簿記解説書と位置づけられるのである（小島 [1971], 33,133頁; 同 [1987], 213頁; see Yamey [1963], pp.162; Bywater and Yamey [1982], p.51）。

なお、Peeleの二つの簿記書の詳細については、小島 [1971], 第5章・第7章を参照されたい (See also Yamey [1963], p.162-163; Bywater and Yamey [1982], pp.51-53; 小島 [1987], 第12章第2節; 中野 [1992], 第3章II)。

- 47) ここで言う「アムシ」、つまり、Joseph Ames (1689~1759) は、イギリスの書誌学者かつ古物蒐集家である。彼の代表的著作に、*Typographical Antiquities: Being an Historical Account of Printing in England: With some Memoirs of our Antient Printers, and A Register of the Books printed by them, From The Year MCCCCLXXI to the Year MDC. With an Appendix Concerning Printing in Scotland and Ireland To the same Time.* (1749)がある。

なお、Amesの略歴については、Matthew and Harrison (eds.) [2004a], pp.937-939を参照されたい。

- 48) Mellisの簿記書の出版年について、海野は「1589年」と誤って記しているが、Beckmannの論稿では正しく「1588年」と記されている (Beckmann [1846a], p.2 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 43頁); 同 [1783], S.8; 同 [1797], p.4;

同 [1814a], p.4; 同 [1817a], p.4)。

- 49) 海野 [1886], 17-18頁; see Beckmann [1846a], pp.2-3 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 43頁); Carter [1874], p.3; cf. Ames [1749], pp.410-411.
- 50) 海野 [1886], 18頁; see Beckmann [1846a], pp.2-3 (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a], 43頁)。

Oldcastle の簿記書は、本文中でも記したように、現存しない (または、発見されていない) 「幻の書」であり、その教示内容は、1588年に刊行された Mellis の簿記書を通じて、間接的に把握されているにすぎない。さらに言えば、Oldcastle と、簿記書の *A profitable treatyce* …… との関係も、1543年に刊行された簿記書が後者しか存在しないという理由から推断されているにすぎない。なお、Oldcastle の簿記書と Mellis の簿記書 (さらには Peele の簿記書) との相互関係等については、小島 [1971], 第3章・第8章 を参照されたい (See also Kats [1926a/1926b]; Coomber [1956]; Yamey [1963], pp.155-159; 同 [1979]; Bywater and Yamey [1982], pp.66-71; 久野 (秀) [1979], 121-138頁; 小島 [1987], 第12章第1節・第3節)。

- 51) 海野 [1886], 19頁; see Carter [1874], p.4.

本文中でも記したように、Collins の *An introduction to merchants accounts*, …… の初版の刊行年は「1652年」でなく「1653年」である。また、「アレキサンドル, リセツト」の名前 (ファースト・ネーム) は正しくは “Abraham” であり、彼の *Amphithalam, or, The Accomptants Closet*, …… の初版の刊行年も正しくは「1660年」である (ただし、「1684年」版の刊行あり)。同様に、Dafforne の *The Merchants Mirrour*: …… の初版の刊行年も「1635年」である (ただし、「1684年」版の刊行あり)。

なお、Collins の簿記書と Liset の簿記書の詳細については、小島 [1987], 第14章第3節 を参照されたい (See also 久野 (秀) [1979], 174-177頁; Bywater and Yamey [1982], pp.105-107)。

また、Dafforne の簿記書の詳細についても、小島 [1971], 第10章 を参照されたい (See also Yamey [1963], pp.169-170; Bywater and Yamey [1982], pp.96-98; 久野 (秀) [1979], 165-174頁; 小島 [1987], 第14章第2節; 中野 [1992], 第3章 III)。

さらに、上記の Dafforne の簿記書に付言すれば、そこには、わずか1頁ではあるが、“Opinion of Book-keepings Antiquity” と題された、簿記の歴史を論じた小稿が収載されている。この稿では、複式簿記の起源が古代のギリシャやローマに遡ることができるという旨の見解が示されている。ただし、これは、彼自身が簿記書の中で「私の良い友人」(A Good Friend of mine) と記している Simon Stevin (後述) の著述に依拠している (翻訳) とされる (Dafforne [1635], “Opinion of Book-keepings Antiquity”; see Have [1956], p.242; Yamey [1980],

p.84; cf. 海野 [1886], 2頁)。

- 52) 1543年に出版された Ympyn の *Nieuwe instructie* …… は、イタリア以外で出版された最初の複式簿記解説書である。同書は、原著 (オランダ語版——正確にはフランドル語版) の刊行年と同じ1543年にフランス語版 (*Nouvelle instruction*…), また、1547年に英語版 (*A notable and very excellent woorke*, ……) が刊行され、それぞれフランス語と英語による最初の複式簿記解説書になっている。

この Ympyn の簿記書 (英語版を含む) の詳細については、小島 [1971], 第4章; 岸 [1975], 第3章; 久野 (秀) [1979], 138-150頁; 橋本 (武) [2008], 第3章 IV を参照されたい (See also Kats [1927a/1927b]; Yamey [1963], pp.159-161; Bywater and Yamey [1982], pp.45-47; 小島 [1987], 第8章第1節)。

- 53) 海野 [1886], 17,18-19頁; see Carter [1874], pp.3-4.

- 54) 海野 [1886], 14-15頁; see Carter [1874], p.4.

Stevin (1548~1620) は、南ネーデルラント (現在のベルギー) のブルージュ (ブルッヘ) 生まれの数学者であり、物理学者・技術者である。「簿記論」 (*Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche Wyse* (1607)) は、彼自身の数学書 *Wisconstighe Ghedachtenissen* (1605~1608) の第5部に収載されており、「イタリア式商人簿記」 (= 商業簿記) (Coopmans Bouckhouding op de Italiaensche Wyse) と「イタリア式領土簿記」 (= 領土簿記) (Bouckhouding in Domeine op de Italiaensche Wyse) 等に分かれる。このうち、複式簿記の基本構造を解説するために著述されたとされる「イタリア式商人簿記」の詳細については、岸 [1975], 第7章; 橋本 (武) [2008], 第4章; 片岡 (泰) [1994], 第17章を、また、複式簿記を領土管理 (財政管理) に適用すべく論じられた「イタリア式領土簿記」については、橋本 (武) [2008], 第4章を、それぞれ参照されたい (See also 小島 [1987], 第13章第3節)

なお、Stevin の数学書は、オランダ語による原書が出版された後、ラテン語版 (*Hypomnemata Mathematica*) とフランス語版 (*Memoires mathematiques*) が刊行されており、このうち、オランダ語による原書は「モウリス親王」 (Prins Maurits van Nassau) に、また、フランス語訳はフランスの「スウリー公」 (Duke of Sully) にそれぞれ献呈されている。海野は、原書と訳書の出版履歴や献呈先の整理の誤りから、Stevin を、ネーデルラントの簿記論者ではなく、フランスのそれとして言及するという混乱を来しているように思われる (See 岸 [1975], 112,148頁)。

- 55) ここで言う「モウリス親王」、つまり、Prins Maurits van Nassau (1567~1625) は、暗殺された父 (Willem van Nassau) の後を継ぎ、ネーデルラントのホラント州とゼーラント州の総督として、ネーデルラントのスペインからの独立戦争 (「八十年戦争」 (Tachtigjarige Oorlog: 1568~1648)) を指導した。彼は、合

理主義者として、自らの軍隊に対して、「軍事革命」と呼ばれるような、徹底した軍事訓練とマニュアル化を図った。複式簿記(=イタリア式簿記)についても、このような軍事革命の一環として、領土(ないし国家)の財政管理のツールとしての役割が期待されたものと考えられる。そして、Stevin は、かかる Maurits の家庭教師を務め、その後に彼の財政を監督する立場に就いたのであり、Stevin はその職責上の必要性から複式簿記を講じたとされる(橋本(武) [2008], 61-62, 108頁; 同 [2014], 第5節)。

- 56) 海野 [1886], 33頁; see Beckmann [1846a], p.3 (特許庁内技術史研究会(訳) [1999a], 44-45頁)。

なお、領土管理(財政管理)に複式簿記を導入しようとする Stevin—Maurits の改革の実施は、1604年1月に決定されている。そして、領土簿記にかかわる帳簿(仕訳帳と元帳)も、1604年のものだけが現存していると言われる(橋本(武) [2008], 95-96頁)。

- 57) 海野 [1886], 33-34頁; see Beckmann [1846a], pp.3-4 (特許庁内技術史研究会(訳) [1999a], 45)。

- 58) ここで Klipstein が言う文献の標題について、海野は「財政要覧(エン、インクワイリー、インツ、ゼ、ファイナンス、ラフ、フランス)」と記しているが、Beckmann の著作のドイツ語版では *Grundsätze der Wissenschaft Rechnungen einzurichten*、英語版では、海野のカタカナ表記と同様に、*An Inquiry into the Fiance of France*、特許庁内技術史研究会による邦訳書では *Recherches sur les finances de France* (正しくは、*Recherches et considerations sur les finances de France*) というように、それぞれ異なる表記が行われている(Beckmann [1786], S.13; 同 [1814a], p.8; 同 [1817a], p.8; 同 [1846a], p.5 (特許庁内技術史研究会(訳) [1999a], 46頁)。

- 59) Colbert (1619~1683) は、Louis XIV (在位1643~1715) の親政下で財務総監等の重要な役職を務め、いわゆる「コルベティズム」(Colbertism) と呼ばれる重商主義的政策を推進した。フランス商事王令(ルイ14世商事王令)もまた、このような政策の具体的実践の一つとして1673年に制定された。かかる王令は、商業帳簿と財産目録に関する包括規定が近代国家の法令中に定められた最初の事例とされる。当該商事王令の詳細については、岸 [1975], 第12章; 同 [2005], 第5節を参照されたい(See also 三光寺 [2014], 第3節)。

- 60) 海野 [1886], 34-35頁; see Beckmann [1846a], p.5 (特許庁内技術史研究会(訳) [1999a], 46-47頁)。

- 61) 海野と同様に、Beckmann の論稿(「イタリア式簿記」)を自らが会計(簿記)に関する歴史叙述を展開する上での底本(実質は翻訳)としていた曾田の場合には、「記簿法 Book-keeping」の叙述は、Beckmann の論稿の前半部分、つまり、イギリスに関する所論を紹介するところまでで終わっている。すなわち、論稿

の後半部分、つまり、官房学者であった Beckmann による簿記の歴史叙述の特徴 (白眉) とも言える公会計 (領土管理または財政管理) への複式簿記の応用に関連する叙述の部分はすべて省かれている。明治初期当時の新しい諸学科の起源を外国文献に依拠しながら簡潔に紹介するということが、曾田が、「記簿法 Book-keeping」のみならず、これを収載した『学課起源畧説』を著した目的であったとすれば、これもまたやむを得ないことであったのかもしれない (中野 [2015], 9-10頁)。

- 62) 海野 [1886], 19-20頁; see Carter [1874], pp.4-5.

なお、海野は、Malcolm の *A Treatise of Book-keeping*, …… (1731) について、Carter の所論に依拠して、「… 紙葉殆ント六百五十二及ブ…」と記しているが、実際には、当該簿記書は、本文97頁に、序文、帳簿の記帳例示、および、補論を加えた内容のものであり、「六百五十二及ブ」というような大部の簿記書ではない (海野 [1886], 19頁; see Carter [1874], p.4)。

- 63) イングランドとの統合後のスコットランドでは、18世紀後半を中心として「スコットランド啓蒙」(Scottish Enlightenment) と呼ばれる文化的黄金時代を迎え、David Hume や Adam Smith といった非凡な個性と知性を併せ持ったスコットランド人がその当時のヨーロッパに啓蒙主義思想の範を示すとともに、18世紀後半からの「工業化」(industrialization)、いわゆる「産業革命」(Industrial Revolution) を機軸とした経済的・社会的変革運動の主体的担い手となった James Watt などの多数の技術者や科学者を輩出した。このような動きは、人材育成、つまり、教育の面で実学重視の伝統を醸成し、1761年設立のパーズ・アカデミー (Perth Academy) を嚆矢とする実学指向の「アカデミー」(academy) と呼ばれる専門学校の登場をみる。かかる実学重視の学校教育の展開は、教室で用いられる教科書としての簿記書に対する需要を喚起させ、さらに、「スコットランド啓蒙」が社会進歩の手段としてアカデミックな書物の出版 (代表例は *Encyclopaedia Britannica*: …… (Edinburgh ed., 1768~1771)) を奨励したことから、簿記・会計の分野においても「スコットランドの優越」(Scottish Ascendancy) と呼ばれる現象、つまり、従来のイングランド人に代わって、Malcolm や Mair などのスコットランド人により優れた教示内容をもつ簿記書が相次いで出版されることになる。特にパーズ・アカデミーの初代校長を務めた Mair の簿記書 *Book-keeping Methodiz'd*: …… は、1736年に初版が出版されて以後、版を重ねながら、1773年には標題も *Book-keeping Moderniz'd*: …… と改められて刊行され、18世紀当時のイギリスにおける複式簿記教科書の標準版ないし決定版とでも称すべき存在になったと言われる (天川 [1966], 188-191頁; Bywater and Yamey [1982], p.164; Mephram [1988], p.77)。

なお、Malcolm の簿記書の詳細については渡邊 [1983], 第 II 部第 1 章; 中野 [1992], 第 4 章 I を、また、Mair の簿記書の詳細については渡邊 [1983], 第 II

部第2章・第4章)；中野 [1992], 第4章II を、それぞれ参照されたい (See also Yamey [1963], pp.172-173; Bywater and Yamey [1982], pp.157-160,164-167; 久野 (秀) [1979], 190-194,197-202頁；小島 [1987], 第15章第3節)。

64) 海野 [1886], 20-21頁；see Carter [1874], p.4.

65) 海野 [1886], 21頁；see Carter [1874], p.5.

66) 海野 [1886], 21頁。

67) 海野 [1886], 21-22頁；cf. Booth [1789], p.5.

海野は、Booth 簿記書の「序論」に記された“when applied to a large scale of business”を、本文中で示したように、「・・・夫ノ商賣ノ大部分ニ應用シテ・・・」と誤訳している。そのため、海野は、Booth の簿記書を高く評価しながらも、従来のイタリア式簿記を大規模商業経営に適した形態に革新することを意図した Booth の教示内容の真意を正しく理解できていないという批判が見られる (小島 [1965], 259-260頁；同 [1973], 205-206頁；cf. Booth [1789], p.5)。

68) 海野 [1886], 22頁。

69) Booth の簿記書の詳細については、中野 [1992], 第5章I；渡邊 [1993], 第6章・第7章を参照されたい (See also Yamey [1963], pp.173-175; Bywater and Yamey [1982], pp.189-195; 久野 (秀) [1979], 28-30,222-226頁；小島 [1987], 第16章第1節)。

なお、海野は、Booth に続く簿記書の著者として、「ウイクス」(John H. Wicks) と「シレス」(John Shires) の名前を挙げている (海野 [1886], 22頁)。

70) Jones は、簿記書の本文の前に掲載されている特許に対する「許可書」(“License to use Jones's new Art or Method of making up Books of Accounts.”)において、自らを“Accomptant”と記している。もちろん、ここで言う“Accomptant”とは、今日的な意味での特定の資格要件を有する“chartered accountant” (あるいは、“certified public accountant”)を指すものではないが、上掲の文章中に“making up Books of Accounts”と記されているように、18世紀当時のイギリスにおいて帳簿を作成する会計職業人としての“accomptant”が出現していたことが示されている。18世紀初頭のイギリスに生じた「南海の泡沫」(South Sea Bubble)に際して事件の舞台となった「南海会社」(South Sea Company：正確には The Governor and Company of the Merchants of Great Britain trading to the South-Sea and Other Parts of America, and for encouraging the Fishery)の事実上の金融子会社の会計帳簿の「検査」(examining)を担当した Charles Snell も同様に、自らを“Accompatant” (あるいは、“Accountant”)と称している (Jones [1796], p.5; see Jones [1795], Title Page; Snell [1709], Title Page; 同 [1721?], Title Page; see also 中野 [2014a])。

なお、上記のように、“accomptant”が今日の“accountant”に相当する単語として用いられている。後者は前者の古語にあたるが、他方で、“account”につい

ては、その古語に相当する“*accompt*”が用いられず、今日と同様に、“*account*”が用いられている。このように、簿記ないし会計の主要な用語に関して、18世紀に入ってもなお、今日的な綴りに統一されることなく、当時の文献でも新旧二通りの綴りの用語が併用されていたことが示される。

71) 海野 [1886], 22-23頁。

72) 海野 [1886], 23-24頁。

Jones は、彼の簿記書 *Jones's English System of Book-keeping*, …… が出版される前年の1795年に予約申込の募集を行っており、その申込数は4,000を超え、イングランド銀行と東インド会社も各々5部を申し込んでいたとされる。また、同書は、イギリスのみならず、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、フランス語、イタリア語、ロシア語に翻訳され、英語で記された簿記書として国際的に有名になった最初のものと言われる（小島 [1987], 377頁註；see Brown (ed.) [1905], p.159; Yamey [1944], p.407; 同 [1956], p.314）。

73) 海野 [1886], 24頁。

74) ここで言及される“James Mill”とは、著名な経済学者の“James Mill”ではなく、“*accountant and notary public*”を職業とした、同姓同名の別人物であるとされる（Yamey [1956b], p.314 (note 3) ; cf. Brown (ed.) [1905], p.167）。

75) 海野 [1886], 24-25頁。

76) 海野 [1886], 25-26頁。

77) See Kelly [1801], p.ix.

78) 新式簿記法に対する Jones の努力がすべて否定されているわけではない。例えば、「・・・しかし、彼の功績は、日記帳、元帳の多桁式金額欄の使用が、後世の帳簿形式の上に、多桁化、表式化への途を示した点で、高く評価されねばならない。・・・」との指摘も見出される（小島 [1987], 387頁；see Carter [1874], p.5）。

79) Brown (ed.) [1905], p.167; see 江村 [1953], 13頁。

Jones (Edward Thomas Jones) の簿記書の詳細については、Yamey [1956b] を参照されたい（See also Yamey [1944] ; 同 [1963], pp.175-179; Bywater and Yamey [1982], pp.196-199; 久野（秀）[1979], 39-41, 227-234頁；小島 [1987], 第16章第2節）。

80) 海野 [1886], 27頁 see Carter [1874], p.5.

81) 海野 [1886], 26頁。

82) 海野 [1886], 26頁。

83) 海野 [1886], 26-27頁。

84) 海野 [1886], 36頁。

85) 海野 [1886], 37-38頁。

アメリカの商業専門学校などにおいて、「・・・學生ヲシテ徒ニ空理ノ一偏ニ

流レザラシム・・・」ことがないように設けられた「實地演習」の具体的内容について、海野は、「・・・今之ヲ例セハ甲モシ銀行者ト爲ルトキハ乙ハ則チ仲買人ト爲リ丙ハ則チ小買人或ハ問屋ト爲リテ相互ニ實地ノ商業ニ模倣シ以テ廣ク商業世界ノ實況ニ通曉セシメ且ツ遠ク加奈陀〔カナダ〕地方ノ諸學校ト相互ニ「コレスポンデンス」〔correspondence〕ヲ訂約シテ通信事務ノ一端ヲ教ヘ・・・」と記している（海野 [1886], 38頁）。

86) 海野 [1886], 38頁。

87) 海野 [1886], 27-28頁。

88) 海野 [1886], 28-32頁。

以下のリストは、『簿記學起原考』の本文中に出版年とカタカナ表記の著者名のみ掲げられている欧米の文献について、筆者が、各種の文献目録やデータベースから推定した結果を、参考のために示したものである。

・1494年：「リウカス、ヂー、バルゴー」

Luca Paciloli, *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*, Venezia, 1494.

・1531年：「ジヨハン、ゴットリーブ」

Johann Gottlieb, *Ein teutsch verständig Buchhalten*・・・, Nuremburg, 1531.

・1543年：「ヒウゲ、ヤールドカスツル」

Hugh Oldcaslte, *A profitable treatyce*・・・, London, 1543.

※ 上掲書は現存しない（または、発見されていない）「幻の書」

・1565年：「バレンチン、メンハー、デー、ケンプテン」

Valentin Mennher von Kempten, *Practique pour brievement apprendre à ciffrer, & tenir livre de comptes*・・・, Antwerp, 1565.

・1569年：「ジエームス、ピール」

James Peele, *The Pathe waye to perfectness*・・・, London, 1569.

※ Peele は、上掲書に先行して、1553年に *The maner and fourme*, ・・・ (London) を刊行

・1588年：「ジョン、メルリス」

John Mellis, *A briefe instruction*・・・, London, 1588.

※ Oldcastle の簿記書 (1543) の復刻・増補版

・1596年：「ニコラス、ペートルー」

Nicolaus Petri (Claes Pietersz), *The pathway to knowledge*・・・, London, 1596.

※ 上掲書は、1576年に Petri (Pietersz) がアムステルダムで刊行した *Practique om te leeren rekenen cypheren ende boechouwen*・・・の

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績 (中野)

“W.P.”による英語版

- ・ 1602年: 「シモン、スチーブン」
Simon Stevin, *Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche Wyse* ……,
Leiden, 1607.
※ 初版は「1602年」でなく「1607年」に刊行 (フランス語版は1608年)
- ・ 1674年: 「ジョン、コリンズ」
John Collins, *An introduction to merchants accounts*, ……, London, 1653.
※ 初版は1653年に刊行 (「1674年」版の刊行あり)
- ・ 1684年: 「アレキサンドル、リセット」
Abraham Liset, *Amphithalami, or, The Accomptants Closet*, ……,
London, 1660.
※ Liset の名前 (ファースト・ネーム) は, 「アレキサンドル」ではなく,
“Abraham” (初版は1660年に刊行 (「1684年」版の刊行あり))
- ・ 1684年: 「リチャード、ダフホルン」
Richard Dafforne, *The Merchants Mirrour*: ……, London, 1635.
※ 初版は1635年に刊行 (「1684年」版の刊行あり)
- ・ 1726年: 「チャーレス、ホットン」
Edward Hatton, *The Merchant's Magazine*: ……, 8th ed., London, 1726.
※ 「1726年」に *The Merchant's Magazine*: …… を出版したのは「チャー
レス、ホットン」(Charles Hutton) でなく “Edward Hatton” (なお,
Hatton の上掲書の初版は「1695年」に刊行 (「1726年」に第八版の
刊行あり))
- ・ 1730年: 「マルコルム」
Alexander Malcolm, *A Treatise of Book-keeping*, ……, London, 1731.
※ 初版は「1730年」ではなく「1731年」に刊行 (なお, Malcolm は,
上掲書に先行して, 1718年に *A New Treatise of Arithmetick and
Book-keeping*, …… (Edinburgh) を刊行)
- ・ 1730年: 「デ、モルガン」
Augustus de Morgan, *Elements of Arithmetic*, London, 1830.
※ 初版は「1730年」ではなく「1830年」に刊行
- ・ 1736年: 「ジョン、メイヤー」
John Mair, *Book-keeping Methodiz'd*: ……, Edinburgh, 1736.
- ・ 1740年: 「ウエブスター」
William Webster, *An Essay on Book-keeping*, ……, London, 1719.
※ 初版は1719年に刊行 (「1740年」に第七版の刊行あり)
- ・ 1750年: 「ジェムス、トブソン」
James Dodson, *The Accountant, or, the method of Book-keeping*,

deduced from clear principles ……, London, 1750.

※「1750年」に簿記書を出版したのは、「ジェムス、トブソン」ではなく、「James Dodson」

- ・1758年：「ドウン」

Benjamin Donn, *The Accountant: containing essays on book-keeping*, ……, London, 1758.

- ・1760年：「ウストン」

William Weston, *The Complete Merchant's Clerk*: ……, London, 1754.

※初版は「1760年」ではなく「1754年」に刊行

- ・1768年：「ドウリング」

Daniel Dowling, *A Complete System of Italian Book-keeping*, ……, Dublin, 1765.

※初版は「1768年」ではなく「1765年」に刊行

- ・1768年：「ジョン、メイヤー 再版」

John Mair, *Book-keeping Methodiz'd*: ……, 2nd ed., Edinburgh, 1741.

※再版（第二版）は「1768年」ではなく「1741年」に刊行（なお、Mair は、1773年に上掲書の実質的な改訂増補版にあたる *Book-keeping Moderniz'd*, …… (Edinburgh) を刊行）

- ・1777年：「ペーリー、エンド、スクラットン」

William Perry, *The Man of Business, and gentleman's assistant*: ……, Edinburgh, 1774.

※初版は1774年に刊行（「1777年」に第三版の刊行あり）

※上掲した「ペーリー」（William Perry）の著書（第三版）の刊行と同じ1777年に、「スクラットン」（James Scruton）の著書（*Practical Counting-House; or, Calculation and Accountantship illustrated*, …… (Glasgow) が別途刊行）

- ・1783年：「テイロル」

William Taylor, *A Complete system of Practical Arithmetic* ……, Birmingham, 1783.

- ・1784年：「デルワース」

Thomas Dilworth, *The Young Book-keeper's Assistant*: ……, 7th ed., London, 1777.

※第七版より前の版は確認できず（「1784年」に第九版の刊行あり）

- ・1789年：「ベンジヤミン、ブース」

Benjamin Booth, *A Complete System of Book-keeping*, ……, London, 1789.

- ・1796年：「エドワード、トーマス、ジョンス」

Edward T. Jones, *Jones's English System of Book-keeping, by Single or*

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績 (中野)

Double Entry …… Bristol, 1796.

- ・ 1801年: 「ビー、ケイリー」

Patrick Kelly, *The Elements of Book-keeping, Both by Single and Double Entry*: …… London, 1801.

- ・ 1807年: 「ローライン」

William Lorraine, *Book-keeping by double entry* …… Hawick, Scotland, 1807.

- ・ 1809年: 「シー、モリソン」

C.Morrison, *A complete system of practical book-keeping*: …… 3rd ed., Glasgow, 1822.

※ 「シー、モリソン」のファースト・ネームについては確認できず (ICAEW[1975]では“Clerk Morrison”, 他方、ICAS[1976a]と同[1976b]では“Charles Morrison”と、それぞれ異なる表記 (なお、Explore the British Libraryでは“C. Morrison”と表記)

※ 第三版より前の版は確認できず

※ 第三版の刊行年についても、ICAEW[1975]では「1823年」、他方、ICAS[1976a]と同[1976b]では「1822年」と、それぞれ異なる表記 (なお、Explore the British Libraryでは「1822年」と表記)

- ・ 1811年: 「チャレス、ホットン 再版」

Charles Hutton, *A Complete Treatise on Practical Arithmetic; and Book-keeping, both by Single and Double Entry*: …… 3rd ed., London, 1771.

※ 第三版より前の版は確認できず (「1811年」に新版 (by Alexander Ingram) の刊行あり)

- ・ 1818年: 「リッチー、エンド、コロネルム」

Frederick W. Cronhelm, *Double Entry by Single*: …… London, 1818.

※ 「リッチー」(Ritchie)の簿記書は確認できず

- ・ 1820年: 「アール、ヂー、ハミルトン」

Robert Hamilton, *An Introduction to Merchandise*: …… 2nd ed., Edinburgh, 1788.

※ 「1820年」に新版 (by Elias Johnston) の刊行あり

- ・ 1823年: 「シー、モリソン 再版」

C.Morrison, *A complete system of practical book-keeping*: …… 3rd ed., Glasgow, 1822.

※ 先に掲記したように、上掲書の第三版の刊行年については、「1823年」ではなく「1822年」とする表記あり

- ・ 1828年: 「チンウル」

William Tinwell, *A Treatise of Practical Arithmetic and Book-keeping by*

Single Entry, New Castle, 5th ed., 1805.

※ 初版の発行年は確認できず

- ・ 1851年：「ゼイ、エー、ベンチット」

James A. Bennett, *The American System of Practical Book-keeping*, . . . , New York, 1820.

※ 「1851年」に第二十九版の刊行あり

- ・ 1851年：「ジェームス、ハツドン」

James Haddon, *Rudimentary book-keeping and commercial phraseology*, London, 1851.

- ・ 1851年：「イラ、メヒウ」

Ira Mayhew, *A Practical System of Book-keeping by Single and Double Entry*, . . . , New York, 1851.

- ・ 1860年：「イラ、メヒウ 再版」

Ira Mayhew, *A Practical System of Book-keeping by Single and Double Entry*, . . . , 60th ed., New York, 1860.

- ・ 1863年：「ブライヤント、エンド、ストラットン」

Henry B. Bryant, Henry D. Stratton and Silas S. Packard, *Bryant & Stratton's Counting House Book-keeping*, . . . , New York, 1863.

※ Bryant, Stratton and Packard は、上掲書に先行して、1861年に *Bryant & Stratton's Common School Book-keeping*: . . . (New York) を刊行 (福澤諭吉 (訳) 『帳合之法』 (全4分冊) (1873/1874) の原書)

- ・ 1868年：「クリツテンデン」

※ 1868年に刊行された「クリツテンデン」(Crittenden) の簿記書は確認できないが、前年の1867年には、以下の簿記書が刊行

- ・ Samuel W. Crittenden and Salmon H. Crittenden, *An Inductive and Practical Treatise on Book-keeping by Single and Double Entry*, . . . (Counting House edition), Philadelphia, 1867 (1st ed., 1857) .

- ・ Samuel W. Crittenden and Salmon H. Crittenden, *An Inductive and Practical Treatise on Book-keeping by Single and Double Entry*, . . . (High School edition), Philadelphia, 1867 (1st ed., 1857) .

- ・ 1868年：「ハミルトン、エンド、ベル」

Robert G.C. Hamilton and John Ball, *Book-keeping*, 3rd ed., Oxford, 1869.

※ 初版の出版年は確認できず (「1868年」版の刊行あり)

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績 (中野)

- ・ 1869年 : 「全 再版」
Robert G.C. Hamilton and John Ball, *Book-keeping*, 3rd ed, Oxford, 1869.
- ・ 1870年 : 「ダブリユ、スミス」
William W. Smith and Edward Martin, *Book-keeping by Single and Double Entry* …… , New York, 1859.
※ 「1873年」 版の刊行あり
- ・ 1871年 : 「エル、ビー、ハナホルド」
Lyman B. Hanaford and Jesse W. Payson, *Book-keeping by Single Entry; for Common Schools;* …… , New York, 1871.
※ 初版は1858年に刊行 (「1871年」 版の刊行あり)
- ・ 1871年 : 「シー、シー、マルス」
Christopher C. Marsh, *The Science of Double-Entry Book-keeping.* …… , Enlarged and Improved ed., New York, 1871.
※ 初版は1830年に刊行 (「1871年」 版の刊行あり)
- ・ 1871年 : 「チャレス、ハツスウル」
Charles H. Haswell, *Book-keeping by Double Entry;* …… , New York, 1871.
- ・ 1871年 : 「ライト」
William Wright, *The National System of Book-keeping;* …… , Philadelphia, 1866.
- ・ 1872年 : 「エー、ジー、ホルソム」
Ezekiel G. Folsom, *The Logic of Accounts; A New Exposition of the Theory and Practice of Double Entry Bookkeeping, Based in Value,* …… , New York, 1873.
※ 初版は「1872年」ではなく「1873年」に刊行
- ・ 1872年 : 「ダブリウ、イングリス」
William Inglis, *Book-keeping by Single and Double Entry* …… , Edinburgh, 1850.
- ・ 1873年 : 「ダブリウ、アール、ラール」
William R. Orr, *The Dominion Accountant;* …… , Toronto, 1872.
※ 初版は「1873年」ではなく「1872年」に刊行
- ・ 1874年 : 「ハミルトン、エンド、ベル 三版」
Robert G.C. Hamilton and John Ball, *Book-keeping*, New and Enlarged ed., Oxford, 1874.
※ 初版の出版年は確認できず (1869年に第三版の刊行あり)
- ・ 1875年 : 「ジョン、カルデコット」
John Caldecott, *A Practical Guide for Retail Tradesmen and Others to Book-keeping by Double Entry;* …… , London, 1851.

- ・ 1875年：「ジー、エヌ、コーメル」
George N. Comer, *Book-keeping Rationalized; adapted to All Kinds of Business*, . . . , Boston, 1861.
※「1875年」版の刊行あり
- ・ 1875年：「エフ、ハイン、カーター」
Frederic H. Carter, *Practical Book-keeping adapted to Commercial and Judicial Accounting*, . . . , 2nd ed., Edinburgh, 1874.
※ 初版の出版年は確認できず
- ・ 1877年：「エチ、モンリー 六版」
Henry Manly, *The Principles of Book-keeping by Double Entry*, . . . , 5th ed., London, 1877.
※ 初版は1864年に刊行
- ・ 1877年：「ゼイ、グロスベック」
John Groesbeck, *Practical Book-keeping, Single and Double Entry*; . . . , Philadelphia, 1875.
- ・ 1880年：「ダッフ」
Charles P. Duff, William H. Duff and Robert P. Duff, *Duff's Common School Book-keeping; Book-keeping by Single and Double Entry*; . . . , New York, 1877.
※「1880年」版の刊行あり

なお、上掲リストの前半部分（1494年の Paciolo から1828年の Tinwell まで）は、「引用書目」に掲げられた「カーター氏 プラクチカル、ブックキーピング」、つまり、Frederic H. Carter の簿記書 *Practical Book-keeping adapted to Commercial and Judicial Accounting*: . . . (2nd ed., 1874) の「序」の一部に含まれた簿記の歴史に関する叙述に拠るものと推測される (See Carter [1874], pp.3-5)。

- 89) 海野 [1886], 32-33頁。
- 90) 海野 [1886], 33頁。
- 91) Basil S. Yamey は、イギリスにおける複式簿記の普及時期とその要因について、おそらく大多数の企業はもっと簡便な記録作成の形式——便宜上「単式簿記」(‘single-entry’) と呼びうるもの——を用いていたということを指摘している。そして、彼は、19世紀に入って、複式簿記の本格的普及が促された要因として、①株式会社企業の増加、②所得課税の実施、③会計専門職業人による唱導という、もっぱら外在的要因を挙げている (Yamey [1949], p.105; 同 [1956a], p.11)。
- 92) 海野 [1886], 38頁。
- 93) 海野 [1886], 38-39頁。

- 94) 本文の後に、以下のような根岸兎三郎による「跋文」(漢文)が掲載されている。

「古人有言欲知今者必通古欲通古者必史夫治史者欲知其所沿革也譬之
原泉滾々而來者其流遠而大不然者不能成淵焉故觀其原則知其流矣海
野君著是書意在此乎世之欲講斯學者宜據此以通其原始原始既通而爲
今法者益明爲今法者明而所以講之益易々焉耳因聊題數語

明治十九年八月

根岸兎三郎識

上掲の跋文(推薦文)を記した根岸は、『仏蘭西行政警察新論』(by Alphonse Grün) (1878)の訳者として知られると言われる(西川(孝) [1982], 195-196頁)。

また、上記の文献以外の根岸の著作として、国立国会図書館サーチによれば、『仏蘭西行政警察新論』(訳書) (1878), 『仏国警察志彙』(訳書) (1879), 『仏国現行警察新典 上巻』(訳書) (1880), 『初学須知統編 (牙氏)』(共訳書) (1881), 『処世の物種: 文明雜俎』(寧楽山人) (1888) などがある。

- 95) 小島は、この点に関連して、「・・・この先覚者の書物を通じてわれわれが益々教えられることは、複式簿記の本質把握の確立なくしては簿記の史的研究は唯単なる歴史的事実の羅列に終って下うことであり、発生史的研究の至難なことである。」と述べている(小島 [1965], 264頁)。
- 96) わが国の会計史研究の劈頭を飾る文献がいずれも曾田と海野というジャーナリストないし実業人によるものであったのに対して、会計の専門的研究者による会計史研究の著作はようやく明治期後半に登場する東夷五郎の著作を嚆矢とする。東は、高等商業学校(→東京高等商業学校→東京商科大学→東京産業大学→現、一橋大学)と神戸高等商業学校(→神戸商業大学→神戸経済大学→現、神戸大学)の両校において教授を務めており、彼が著した『新案詳解 商業簿記』(1902)に「簿記の起源及沿革」、また、『商業會計 第壹輯』(1908)に「簿記法古代の沿革」という、それぞれ簿記の歴史を講じた論稿が収載されている。ただし、一次史料の入手(蒐集)と分析が容易でないという、先行する曾田や海野と比して研究条件がほとんど異なる状況下において、東の二つの論稿も、海外の先行研究の成果を二次史料として用いたものであった。すなわち、前者は、注34)で言及したイギリスの Kelly の簿記書 *The Elements of Book-keeping*... (1801) に収載された“A Short History of Book-keeping”に、また、後者は、その当時に出版されたばかりで、今日でもなお会計史の古典書と位置づけられている Richard Brown の編著になる会計史書 *A History of Accounting and Accountants* (1905) に、それぞれ依拠したものであった(東 [1902], 第3編第8章; 同 [1908], 第15章; see 中野 [2011b])。
- 97) 『簿記學起源考』の刊行後、その影響を受けたとされる著作が登場する。その中

には、例えば、以下の著作が含まれるとされる。すなわち、堤永類(編述)『簿記學教程』(1886)、内尾直喜(編)『簿記之友』(1889)、石橋多喜郎『家計簿記學』(1894)、大谷津直磨『簿記學講義』(1894)、勝村栄之助『普通簿記學教科書』(1900)、益野倍太郎『複式商業簿記法』(1901)などである(西川(孝)[1975], 7-8頁;同[1982], 202-203頁;see 益野[1901], 第壹編第二章第一節)。

なお、海野は、『簿記學起原考』の出版から十数年を経た1899年に、歴史書ではない、純然たる簿記の解説書である『實用簿記法』を出版している。そして、その中でも、特に「簿記法の起源」と題した項を設けて、簿記の歴史を簡潔に論じている。ただし、それはわずか4頁の小稿であり、その内容も、基本的には、『簿記學起原考』の場合と同様に、簿記書とその著者たちの名前の羅列的叙述であり、ほとんどの場合、教示内容どころか、簿記書の標題や出版年への言及もないという、文献史的研究でも、その初歩的段階を脱しないものである。海野の当該論稿の詳細については、中野[2017]を参照されたい。

[参考文献]

<研究書・研究論文等>

- 天川潤次郎 [1966] 『デフォー研究—資本主義經濟思想の—源流—』 未來社。
- 泉谷勝美 [1964] 『中世イタリア簿記史論』 森山書店。
- [1979] 『イタリア會計史』, 小島(編著) [1979], 39-88頁。
- [1980] 『複式簿記生成史論』 森山書店。
- [1997] 『スンマへの径』 森山書店。
- 井上 清 [1968] 『ヨーロッパ會計史』 森山書店。
- [1980] 『ドイツ簿記會計史』 有斐閣。
- 海野力太郎(纂譯) [1886] 『簿記學起原考』 海野力太郎。
- [1899] 『實用簿記法』 春陽堂。
- 海老原濟・梅浦精一(訳)(A.A. Shand(講述)) [1873a/1873b/1873c/1873d/1873e] 『銀行簿記精法(一~五)』 大蔵省。
- 江頭恒治 [1959] 『近江商人』 弘文堂。
- 江村 稔 [1953] 『複式簿記生成發達史論』 中央經濟社。
- 大森研三 [1921] 「我國在來の商業帳簿」 經濟論叢(京都帝國大學), 第20巻第5号, 117-133頁
- 岡田誠一 [1935] 「明治簿記學史断片」, 日本會計學會(編) [1935] 『會計理論』(東夷五郎・下野直太郎先生古稀記念論文集I) 森山書店, 297-323頁。
- 小倉榮一郎 [1962] 『江州中井家帖合の法』 ミネルヴァ書房。
- [1973] 「わが国固有の會計法の發達と西洋式簿記法」, 日本會計研究学会近

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績 (中野)

- 代会計制度百周年記念事業委員会 (編) [1973], 40-53頁。
- [1979] 「わが国固有の簿記会計法」, 小島 (編著) [1979], 259-283頁。
- [1990] 『近江商人の系譜—活躍の舞台と経営の実像—』 (現代教養文庫) 社会思想社。
- 片岡泰彦 [1988] 『イタリア簿記史論』 森山書店。
- [1994] 『ドイツ簿記史論』 森山書店。
- [2005] 「複式簿記の誕生とパチョーリ簿記論—イタリア簿記史—」, 平林 (編著) [2005], 19-35頁。
- [2007] 『複式簿記発達史論』 大東文化大学経営研究所。
- [2012a] 「複式簿記の生成・発展と「パチョーリ簿記論」への展開」, 千葉・中野 (共編著) [2012], 33-71頁。
- [2012b] 「「マルシュの簿記法」に関する一考察: A Study of Works on Book-keeping of Marsh」 経済論集 (大東文化大学), 第98号, 35-65頁。
- [2014] 「ドイツ式簿記とイタリア式簿記—フッガー家の会計制度と16~19世紀のドイツ簿記書—」, 中野・清水 (共編著) [2014], 46-66頁。
- 片岡義雄 [1967] 『増訂 パチョーリ「簿記論」の研究 (第二版)』 森山書店。
- 加藤 斌 (訳) [1873/1877] 『商家必要 (初篇上・下, 二篇上・下, 附録)』 新民主。
- 河原一夫 [1977] 『江戸時代の帳合法』 ぎょうせい。
- 岸 悦三 [1975] 『会計生成史—フランス商事王令会計規定研究—』 同文館出版。
- [1979] 「フランス会計史」, 小島 (編著) [1979], 113-151頁。
- [1983] 『会計前史—パチョーリ簿記論の解明—』 同文館出版。
- [2005] 「ルイ14世商事王令とサヴァリー—フランス簿記史—」, 平林 (編著) [2005], 67-85頁。
- 北島正元 (編著) [1962] 『江戸商業と伊勢店—木綿問屋長谷川家の経営を中心として—』 吉川弘文館。
- 木村和二郎 [1950] 『日本における簿記會計學の發展』 (潮流講座 經濟學全集 第一部 經濟理論の發展) 潮流社。
- 久野光朗 [1985] 『アメリカ簿記史—アメリカ会計史序説—』 同文館出版。
- 黒澤 清 [1973] 「わが国制度会計百年の歩み」, 日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会 (編) [1973], 1-30頁。
- [1982] 『日本会計學發展史序説』 雄松堂書店。
- [1990] 『日本会計制度發展史』 財経詳報社。
- 小島男佐夫 [1965] 『複式簿記發生史の研究 (改訂版)』 森山書店。
- [1971] 『英国簿記発達史』 森山書店。
- [1973] 『簿記史』 森山書店。
- (編著) [1979] 『会計史および会計學史』 (体系近代會計學VI) 中央經濟社。
- [1987] 『会計史入門』 森山書店。

- 小林儀秀 (訳) [1875a/1875b] 『馬耳蘇氏記簿法 (一・二)』 文部省。
—— (訳) [1876a/1876b/1876c] 『馬耳蘇氏複式記簿法 (上・中・下)』 文部省。
- 三光寺由実子 [2014] 「フランスの簿記事情と会計規定の成立・展開—イタリア式簿記の導入以前からナポレオン商法まで—」, 中野・清水 (共編著) [2014], 25-45頁。
- 白坂 亨 [2013] 『わが国会社財務制度の形成過程に関する研究』 大東文化大学経営研究所。
- 末永國紀 [2000] 『近江商人—現代を生き抜くビジネスの指針—』 (中公新書) 中央公論新社。
- 曾田愛三郎 (編輯) [1878] 『學課起源畧説』 曾田愛三郎 (なお、「記簿法 Book-Keeping」の原寸大写真複製版が西川 (孝) [1959] に収載)。
- 田口卯吉 [1886] 「簿記學起原考」 東京經濟雜誌, 第334号, 396-397頁。
- 田口 親 [2000] 『田口卯吉』 (人物叢書・新装版) 吉川弘文館。
- 田中孝治 [2005] 「日本の伝統簿記と洋式簿記の導入—日本簿記史—」, 平林 (編著) [2005], 121-136頁。
—— [2014] 『江戸時代帳合法成立史の研究—和式会計のルーツを探求する—』 森山書店。
- 千葉準一・中野常男 (共編著) [2012] 『会計と会計学の歴史』 (体系近代会計学第8巻) 中央經濟社。
- 津村怜花 [2007] 「明治初期の簿記書研究—『帳合之法』の果たした役割」 會計, 第172巻第6号, 118-129頁。
—— [2009] 「『銀行簿記精法』(1873)に関する一考察」 六甲台論集 (経営学編) (神戸大学), 第56巻第1号, 33-50頁。
—— [2010] 「『馬耳蘇氏記簿法』および『馬耳蘇氏複式記簿法』に関する一考察」 日本簿記学会年報, 第25号, 49-57頁。
—— [2014] 「和式帳合と複式簿記の輸入—江戸時代から明治時代にかけて—」, 中野・清水 (共編著) [2014], 32-150頁。
—— [2016] 「福沢による西洋簿記現地化の試み」 企業会計, 第68号第3号, 16-24頁。
- 中野常男 [1992] 『会計理論生成史』 中央經濟社。
—— [2007] 「複式簿記と単式簿記: 18世紀イギリスの簿記文献を中心に」, 中野常男 (編著) [2007] 『複式簿記の構造と機能—過去・現在・未来—』 同文館出版, 177-214頁。
—— [2011a] 「会計史—会計における歴史研究の現状と課題—」 企業会計, 第63巻第7号, 4-10頁。
—— [2011b] 「わが国における会計史の萌芽—東夷五郎の簿記史研究を中心として—」 國民經濟雜誌, 第204巻第3号, 4-20頁。
—— [2012a] 「『会計』の起源とわが国における会計史研究の展開と課題」, 千葉・

〔論文〕 わが国における会計史研究の先駆的業績（中野）

- 中野（共編著）[2012], 1-29頁。
- [2012b]「近代会計理論の生成—19世紀英米会計文献に見る資本主義理論生成過程の点描—」, 千葉・中野（共編著）[2012], 261-303頁。
- [2014a]「18世紀イギリスの金融不祥事と会計監査—「南海の泡沫」（1720）における「会計士」の役割—」経営研究（神戸大学大学院経営学研究科）, No.59,（電子刊行物 <http://www.b.kobe-u.ac.jp/resource/br/No.59.pdf>）。
- [2014b]「15～19世紀イギリスの簿記事情—複式簿記の伝播とその漸次的普及—」, 中野・清水（共編著）[2014], 91-110頁。
- [2015]「曾田愛三郎：わが国における会計史の先駆者—曾田と Beckmann の簿記史研究の交差—」国民経済雑誌, 第212巻第3号, 1-20頁。
- [2016]「わが国における会計史研究の先駆者たち—曾田愛三郎・海野力太郎・東夷五郎の簿記史研究について—」経営研究（神戸大学大学院経営学研究科）, No.62（電子刊行物 <http://www.b.kobe-u.ac.jp/resource/br/No.62.pdf>）。
- [2017]「会計史に関する海野力太郎の第二の論稿—『實用簿記法』（1889）中の「簿記法の起源」をめぐる—」経営論叢（国士館大学）, 第6巻第2号, 35-62頁。
- ・清水泰洋（共編著）[2014]『近代会計史入門』同文館出版。
- 西川孝治郎 [1935]「我國初期の簿記書に就て」會計, 第36巻第1号, 144-151頁。
- [1959]『複製パチョーリ簿記論』森山書店。
- [1971]『日本簿記史談』同文館出版。
- [1973]「日本簿記史上の明治6年の意義」, 日本会計研究学会近代制度会計百周年記念事業委員会（編）[1973], 126-137頁。
- [1975]「海野力太郎纂訳「簿記学起源考」について」国民経済雑誌, 第132巻第4号, 1-18頁。
- [1978]「海野力太郎訳「簿記学起源考」の研究」會計, 第113巻第6号, 76-87頁。
- [1979]「洋式簿記のわが国への導入」, 小島（編著）[1979], 284-309頁。
- [1982]『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂書店。
- 西川 登 [1993]『三井家勘定管見—江戸時代の三井家における内部会計報告制度および会計処理技法の研究—』白桃書房。
- 日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会（編）[1973]『近代会計百年—その歩みと文献目録—』日本会計研究学会。
- 橋本武久 [2005]「商人国家の台頭とステフィン—ネーデルラント簿記史—」, 平林（編著）[2005], 53-66頁。
- [2008]『ネーデルラント簿記史論—Simon Stevin 簿記論研究—』同文館出版。
- [2014]「ネーデルラント会計史の現代的意義—ステヴィンの「簿記論」とオ

- ランダ東インド会社」, 中野・清水 (共編著) [2014], 67-90頁。
- 橋本寿哉 [2009] 『中世イタリア複式簿記生成史』 白桃書房。
- 東夷五郎 [1903] 『新案詳解 商業簿記』 大倉書店。
- [1908] 『商業會計 第壹輯』 大倉書店。
- 久野秀男 [1979] 『英米 (加) 古典簿記書の發展史的研究』 学習院。
- 土方 久 [2005a] 「フッガー家の会計と複式簿記の伝播—ドイツ簿記史—」, 平林 (編著) [2005], 36-52頁。
- [2005b] 『複式簿記の歴史と理論—ドイツ簿記の16世紀—』 森山書店。
- [2008] 『複式簿記会計の歴史と論理—ドイツ簿記の16世紀から複式簿記会計への進化—』 森山書店。
- [2012] 『複式簿記生成史の研究—ドイツ固有の簿記とイタリア式簿記の交渉と融合—』 森山書店。
- 平井泰太郎 [1920] 「『ばちおり簿記書』研究」, 神戸會計學會 (編) [1920] 『會計學論叢』 (第四集), 73-194頁。
- [1936] 「出雲帳合の性質」 國民經濟雜誌, 第61巻第3号, 319-346頁。
- 平林喜博 (編著) [2005] 『近代会計成立史』 同文館出版。
- 福澤諭吉 (訳) [1873a/1873b/1874a/1874b] 『帳合之法 (一~四)』 慶應義塾出版局。
- [1958] 『福澤諭吉全集 第一巻』 (福澤全集緒言・増訂華英通語・西洋事情初編・西洋事情外編・西洋事情二編) 岩波書店。
- 益野倍太郎 [1901] 『複式商業簿記法 全』 金港堂書籍。
- 山口 孝 [1965] 「フォルソム『勘定の論理』研究序説」 明治商学論叢, 第49巻第3号, 247-265頁。
- 山下勝治 [1936] 「出雲帳合に於ける両面勘定」 調査研究 (彦根高等商業學校), 第50輯, 彦根高等商業學校調査課。
- 渡邊 泉 [1983] 『損益計算史論』 森山書店。
- [1993] 『決算會計史論』 森山書店。
- Ames, J. [1749], *Typographical Antiquities: Being an Historical Account of Printing in England: With some Memoirs of our Antient Printers, And A Register of the Books printed by them, From The Year MCCCCLXXI to the Year MDC. . . .*, London.
- [1785/1786/1790], *Typographical Antiquities: Or An Historical Account of the Origin and Progress of Printing in Great Britain and Ireland:* Begun by the late Joseph Ames, F. R. & A. S. S. (by William Herbert), Vols. I-III, London.
- Anderson, A. [1764a/1764b], *An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, From the Earliest Accounts to the present Time. . . .*, Vols. I-II, London.

- [1787a/1787b/1787c/1787d], *An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, From the Earliest Accounts*. . . ., Vols.I-IV, London.
- Beckmann, J. [1783], *Beyträge zur Geschichte der Erfindungen*, Erster Band, Leipzig.
- [1797a/1797b/1797c], *A History of Inventions and Discoveries* (translated by W. Johnson), Vols.I-III, London.
- [1814a/1814b/1814c/1814d], *A History of Inventions and Discoveries* (translated by W. Johnson). 2nd ed., Vols.I-IV, London.
- [1817a/1817b/1817c/1817d], *A History of Inventions and Discoveries* (translated by W. Johnson). 3rd ed., Vols.I-IV, London.
- [1846a/1846b], *A History of Inventions, Discoveries and Origins* (translated by W. Johnson; revised and enlarged by W. Francis and J.W. Griffith), 4th ed., Vols.I-II, London (特許庁内技術史研究会 (訳) [1999a/1999b/2000a/2000b] 『西洋事物起原 (一) ~ (四)』 (岩波文庫) 岩波書店) .
- Booth, B. [1789], *A Complete System of Book-keeping, by an Improved Mode of Double-Entry*:, London.
- Boyer, C.B. [1989], *A History of Mathematics*, 2nd ed. (revised by U.C. Merzbach), New York.
- Brown, R. (ed.) [1905], *A History of Accounting and Accountants*, Edinburgh.
- Brown, R.G. and K.S. Johnston [1963], *Paciolo on Accounting*, New York.
- Bryant, H.B., H.D. Stratton and S.S. Packard [1861], *Bryant and Stratton's Common School Book-keeping; Embracing Single and Double Entry*. . . ., New York.
- Bywater, M.F. and B.S. Yamey [1982], *Historic Accounting Literature: a companion guide*, London.
- Carter, F.H. [1874], *Practical Book-keeping adapted to Commercial and Judicial Accounting*. . . ., 2nd ed., Edinburgh.
- Chatfield, M. [1977], *A History of Accounting Thought*, revised ed., Huntington, New York.
- and R. Vangermeersch (eds.) [1996], *The History of Accounting: An International Encyclopedia*, New York.
- Coomber, B.R.[1956], "Hugh Oldcastle and John Mellis," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.206-214.
- Cripps, J. [1994], "Particularis de Computis et Scripturis 1494 Fra Luca Pacipoli," (電子刊行物 : jeremycripps.com/docs/Summa.pdf) .
- Crivelli, P. [1924], *An Original Translation of the Treatise on Double-Entry Book-keeping by Frater Lucas Pacioli*, London.
- Cronhelm, F.W. [1818], *Double Entry by Single, A New Method of Book-keeping, Applicable to All Kinds of Business; and Exemplified in Five Sets of Books*,

- London.
- Dafforne, R. [1635], *The Merchants Mirrour: or, Directions for the Perfect Ordering and Keeping of His Accounts;* ····, London.
- De Roover, R. [1956], "Accounting prior to Luca Pacioli according to the Account-books of Medieval Merchants," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.114-174.
- De Ste. Croix, G.E.M. [1956], "Greek and Roman Accounting," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.14-74.
- Folsom, E.G. [1873], *The Logic of Accounts; A New Exposition of the Theory and Practice of Double-Entry Bookkeeping, Based in Value, As Being of Two Primary Classes, Commercial and Ideal;* ····, New York.
- Foster, B.F. [1836], *A Concise Treatise on Commercial Book-keeping, Elucidating the Principles and Practice of Double Entry* ····, Boston.
- [1843], *Double Entry Elucidated: An Improved Method of Teaching Book-keeping*, London.
- [1852], *The Origin and Progress of Book-keeping: Comprising an Account of All the Works on this Subject, Published in the English Language, from 1543 to 1852, with Remarks, Critical and Historical*, London.
- Fredet, P. [1879], *Ancient History; Dispersion of the Sons of Noe, to the Battle of Actium and Change the Roman Republic into an Empire.* ····, 33rd ed., Baltimore.
- Geijsbeek, J.B. [1914], *Ancient Double-Entry Bookkeeping: Lucas Pacioli's Treatise reproduced and translated with reproductions, notes and abstracts from Manzoni, Pietra, Mainardi, Ympyn, Stevin and Dafforne*, Denver, Colorado.
- Gitti, V. [1878], *Fra Luca Paciolo, Tractatus de Computis et Scripturis*, Torino.
- Haulotte, R. et E. Stevelinck [1962], *Luca Pacioli: Sa vie, Son œuvre: La première traduction en français du premier traité de comptabilité Imprimé a Venise*, Brussels (Reimpression, Vesoul, 1975) .
- Have, O. ten [1956], "Simon Stevin of Bruges," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp. 236-246.
- Hügli, F. [1923], *Die Buchhaltungs-Systeme und Buchhaltungs-Formen: ein Lehrbuch der Buchhaltung*, 3.Aufl., Bern.
- Inglis, W. [1850], *Book-keeping by Single and Double Entry;* ····, Edinburgh.
- Jackson, J.G.C. [1956], "The History of Methods of Exposition of Double-Entry Book-keeping," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.288-312.
- Jäger, E.L. [1876], *Lucas Pacioli und Simon Stevin*, Stuttgart.
- Jones, E.T. [1795], *An Address to Bankers, Merchants, Tradesmen, &c. Intended as*

- an Introduction to a New System of Book-keeping*, . . . , Bristol.
- [1796], *Jones's English System of Book-keeping, by Single or Double Entry*, . . . , Bristol.
- [1797], *A Defence of the English System of Book-keeping*, . . . , Bristol.
- [1810], *The English System of Balancing Books, Being a New and Improved Method*, . . . by *Double or Single*, . . . , Bristol.
- [1831], *The science of book-keeping, exemplified in Jones's English systems of single and double entry and balancing books*, London.
- Jones, T. [1841], *The Principles and Practice of Book-keeping, Embracing an Entirely New and Improved Method of Imparting the Science*, . . . , New York.
- Käfer, K. [1966], *Theory of Accounts in Double-Entry Bookkeeping*, Urbana, Illinois (安平昭二 (訳) [1972] 『ケーファー 複式簿記の原理』 千倉書房) .
- [1974], *Grundzüge der Buchhaltungs-und Konthentheorie*, Zürich.
- Kats, P. [1926a/1926b], "Hugh Oldcastle and John Mellis — I · II," *The Accountant*, Vol.LXXIV, No.2677, pp.483-487; Vol. LXXIV, No.2682, pp.641-648.
- [1927a/1927b], "The 'Nouvelle Instruction' of Jehan Ympyn Christophle — I · II," *The Accountant*, Vol. LXXVII, No.2750, pp.261-269; Vol. LXXVII, No.2751, pp.287-296.
- [1930a/1930b/1930c], "James Peele's 'Maner and Fourme,'" *The Accountant*, Vol.LXXXII, No.2875, pp.41-44; Vol. LXXXII, No.2876, pp.88-91; Vol. LXXXII, No.2877, pp.119-122.
- Kelly, P. [1801], *The Elements of Book-keeping, Both by Single and Double Entry: Comprising a System of Merchants Accounts, Founded on Real Business, Arranged According to Modern Practice, and Adapted to the Use of Schools*, London.
- Kheil, K.P. [1894], *Luca Pacioli, Traktát o účentnictivi z roku 1494*, Prag.
- Lee, T.A., A. Bishop and R.H. Parker (eds.) [1996], *Accounting History from the Renaissance to the Present: A Remembrance of Luca Pacioli*, New York.
- Littleton, A.C. [1933], *Accounting Evolution to 1900*, New York (片野一郎 (訳) [1978] 『リトルトン 会計発達史 (増補版)』 同文館出版) .
- and B.S. Yamey (eds.) [1956], *Studies in the History of Accounting*, London.
- McMickle, P.J. and P.H. Jensen [1988], *The Birth of American Accountancy: A Bibliographic Analysis of Works on Accounting Published in America through 1820*, New York.
- Macpherson, D. [1805a/1805b], *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries, and Navigation*, . . . , Vols.I-II, London.

- Mair, J. [1736], *Book-keeping Methodiz'd: or, a Methodical Treatise of Merchant-Accounts, According to the Italian Form.*, Edinburgh.
- [1773], *Book-keeping Moderniz'd: or, Merchant-Accounts by Double Entry, according to the Italian form:*, Edinburgh.
- Malcolm, A. [1718], *A New Treatise of Arithmetick and Book-keeping,*, Edinburgh.
- [1731], *A Treatise of Book-keeping, or, Merchant Accounts; in the Italian Method of Debtor and Creditor.*, London.
- Marsh, C.C. [1831], *The Science of Double-Entry Book-keeping,*, 2nd ed., Baltimore (reprinted ed., Tokyo, 1982) .
- [1859] *A Course of Practice in Single Entry Book-keeping,*, New York.
- Matthew, H.C. and B. Harrison (eds.) [2004a/2004b], *Oxford Dictionary of National Biography*, Vol.I & Vol II, Oxford.
- Mellis, J. [1588], *A briefe instruction and maner howv to keepe bookes of Accountts after the order of Debitor and Creditor,*, London.
- Mepham, M.J. [1988], *Accounting in Eighteenth Century Scotland,* New York.
- Nakano, T. and O. Kojima [1992], "Luca Pacioli and His Treatise on Bookkeeping," *The Annals of the School of Business Administration, Kobe University,* No.36, pp.29-42.
- Nishikawa, K. [1956], "The Early History of Double-entry Book-keeping in Japan," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.380-387.
- [1959], "Origin of Book-Keeping (Reproduction of Original Manuscript in English of Rikitaro Unno, Author of BOKIGAKU KIGENKO)," in 西川 (孝) [1982], pp. 1 -17.
- Parker, R.H. [1986], *The Development of Accountancy Profession in Britain to the Early Twentieth Century.* The Academy of Accounting Historians (友岡 賛・小林麻衣子 (訳) [2006] 『会計士の歴史』慶應義塾大学出版会) .
- and B.S. Yamey (eds.) [1994], *Accounting History: Some British Contributions,* London.
- Peele, J. [1553], *The maner and fourme how to kepe a perfecte reconyng, after the order of moste worthie and notable accompte, of Debitour and Creditour*, London.
- [1569], *The Pathe waye to perfectenes, in th'accompte of Debitour and Creditour:*, London.
- Penndorf, B. [1913], *Geschichte der Buchhaltung in Deutschland,* Leipzig.
- [1933], *Luca Pacioli: Abhandlung über die Buchhaltung 1494,* Stuttgart.
- Peragallo, E. [1938], *Origin and Evolution of Double Entry Bookkeeping: A Study of*

- Italian Practice from the Fourteenth Century*, New York.
- Previts, G.J. and B.D. Merino [1998], *A History of Accountancy in the United States: The Cultural Significance of Accounting*, Columbus, Ohio.
- Row-Fogo, J. [1898], "The History of Book-keeping," *The Accountants' Magazine*, Vol. II, No.16, pp.328-337.
- Schär, J.F. [1890], *Versuch einer wissenschaftlichen Behandlung der Buchhaltung*, Basel.
- [1922], *Buchhaltung und Bilanz*, 5.Aufl., Berlin (林 良吉 (訳) [1925]『會計及び貸借対照表』同文館; 林 良二 (訳) [1986/1987]『シェアー 簿記会计学 <上・下>』新東洋出版社) .
- Scheerer, F.[1950], *Kontentheorien der doppleten Buchhaltung*, Zürich (安平昭二 (訳) [1969]『F. シェーラー 複式簿記の基礎理論』中央経済社) .
- Sheldahl, T.K. [1985], "American's Earliest Recorded Text in Accounting: Sarjeant's 1789 Book," *The Accounting Historians Journal*, Vol.XII, No.2, pp.1-42.
- (ed.) [1989], *Accounting Literature in the United States before Mitchell and Jones (1796)*, New York.
- Snell, C. [1709], *A Guide to Book-keepers, According to the Italian Manner: Now in General Use. Directing Young Accomptants to the Books and Accompts* . . . , London.
- [1721?], *Observations made upon Examining the Books of Sawbridge and Company*, London.
- Stevin, S. [1607], *Vorstelicke Bouckhouding op de Italiaensche Wyse* . . . , Leiden.
- Sutherland, P. [1940], "Hugh Oldcastle and the 'Profitable Treatyce' of 1543," *The Accountant*, Vol.CII, No.3407, pp.334-336.
- Taylor, R.E. [1942], *No Royal Road: Luca Pacioli and His Times*, Chapell Hill, North Carolina (reprinted ed., New York, 1978) .
- [1944], "The Name of Pacioli," *The Accounting Review*, Vol.XIX, No.1, pp. 69-76.
- [1956], "Luca Pacioli," in Littleton and Yamay (eds.) [1956], pp.175-184.
- Todhunter, I. [1886], *The Elements of Euclid for the Use of Schools and Colleges;*. . . , London.
- Williams, J.F.L. [1820a/1820b], *An Historical Account of Inventions and Discoveries in those Arts and Science;*. . . , Vols.I-II, London.
- Winjum, J.O. [1970], *The Role of Accounting in the Economic Development in England: 1500-1750*, Urbana, Illinois.
- Wolf, A.H. [1912], *A Short History of Accountants and Accountancy*, London (片岡 義雄 (訳) [1947]『ウルフ 古代會計史』邦光堂書店; 同 (訳) [1954]『ウルフ

古代会計史】(中経文庫)中央経済社;片岡義雄・片岡泰彦(訳)[1977]『ウル
フ 会計史』法政大学出版会)。

- Yamey, B.S. [1944], "Edward Jones's 'English System of Book-keeping,'" *The Accounting Review*, Vol.XIX, No.4, pp.407-416.
- [1949], "Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism," *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol.I, Nos.2& 3, pp.99-113.
- [1956a], "Introduction," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.1-13.
- [1956b], "Edward Jones and the Reform of Book-keeping, 1795-1810," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.313-324.
- [1963], "A Survey of Books on Accounting in English, 1543-1800," in Yamey *et al.* [1963], pp.155-179.
- [1975], "Four Centuries of Books on Book-keeping and Accounting," in ICAEW [1975], pp.xvii-xxvi.
- [1978], "Introduction," in F.W. Cronhelm [1978], *Double Entry by Single*, . . . , reprinted ed., New York, pp.1-6.
- [1979], "Oldcastle, Peele and Mellis: A Case of Plagiarism in the Sixteenth Century," *Accounting and Business Research*, Vol.IX, No.35, pp.209-216.
- [1980], "Early Views on the Origin and Development of Book-keeping and Accounting," *Accounting and Business Research*, Vol.X, No.37A, pp.81-92.
- (ed.) [1990], *Historic Accounting Literature II: Supplementary Volume*, Tokyo.
- [1990a], "Accounting Literature 1494-1800: A Survey," in Yamey (ed.) [1990], pp.3-17 (片岡泰彦(訳)[1990]「会計学文献概観(一四九四年～一八〇〇年)」會計, 第137巻第4号, 127-144頁)。
- [1990b], "Introduction to Historic Accounting Literature, Second Series: Books on Book-keeping and the Spread of the Double Entry System," in Yamey (ed.) [1990], pp.18-35.
- , H.C. Edey and H.W. Thomson [1963], *Accounting in England and Scotland, 1543-1800, Double Entry in Exposition and Practice*, London.

<文献目録>

- 渡邊 泉 [1983]「イギリス古典簿記書文献目録(1543年～1843年)」, 渡邊 [1983] (付録), 241-250頁。
- Bentley, H.C. and R.S. Leonald [1934/1935], *Bibliography of Works on Accounting by American Authors*, Vol.I (1796-1900) and Vol.II (1901-1934), Boston.
- Hatfield, H.R. and A.C. Littleton [1932], "A Check-List of Early Bookkeeping Text," *The Accounting Review*, Vol.VII, No.3, pp.194-206.
- Institute of Chartered Accountants in England and Wales (ICAEW) [1975],

[論文] わが国における会計史研究の先駆的業績（中野）

Historical Accounting Literature, London.

Institute of Chartered Accountants of Scotland (ICAS) (Scottish Committee on Accounting History) [1976a], *Accounting in Scotland: A Historical Bibliography*, 2nd ed., Edinburgh.

——— [1976b], *An Accountant' Book Collection 1494-1930: Catalogue of the Antiquarian Collection of The Institute of Chartered Accountants of Scotland*, 3rd ed., Edinburgh.

Thomson, H.W. (comp.) [1963], *Bibliography: Books on Accounting in English, 1543-1800*, in Yamey *et al.* [1963], pp.202-224.

Woolf, A.H. [1912], "Bibliography," in Woolf [1912], pp.197-239.

<データベース>

国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>)

Eighteenth Century Collections Online (ECCO) (<http://find.galegroup.com/>)

Explore the British Library (<http://explore.bl.uk/>)

Advanced Book Search - Google Books

(https://books.google.com/advanced_book_search)

Library of Congress Online Catalog (<http://catalog.loc.gov/>)